JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

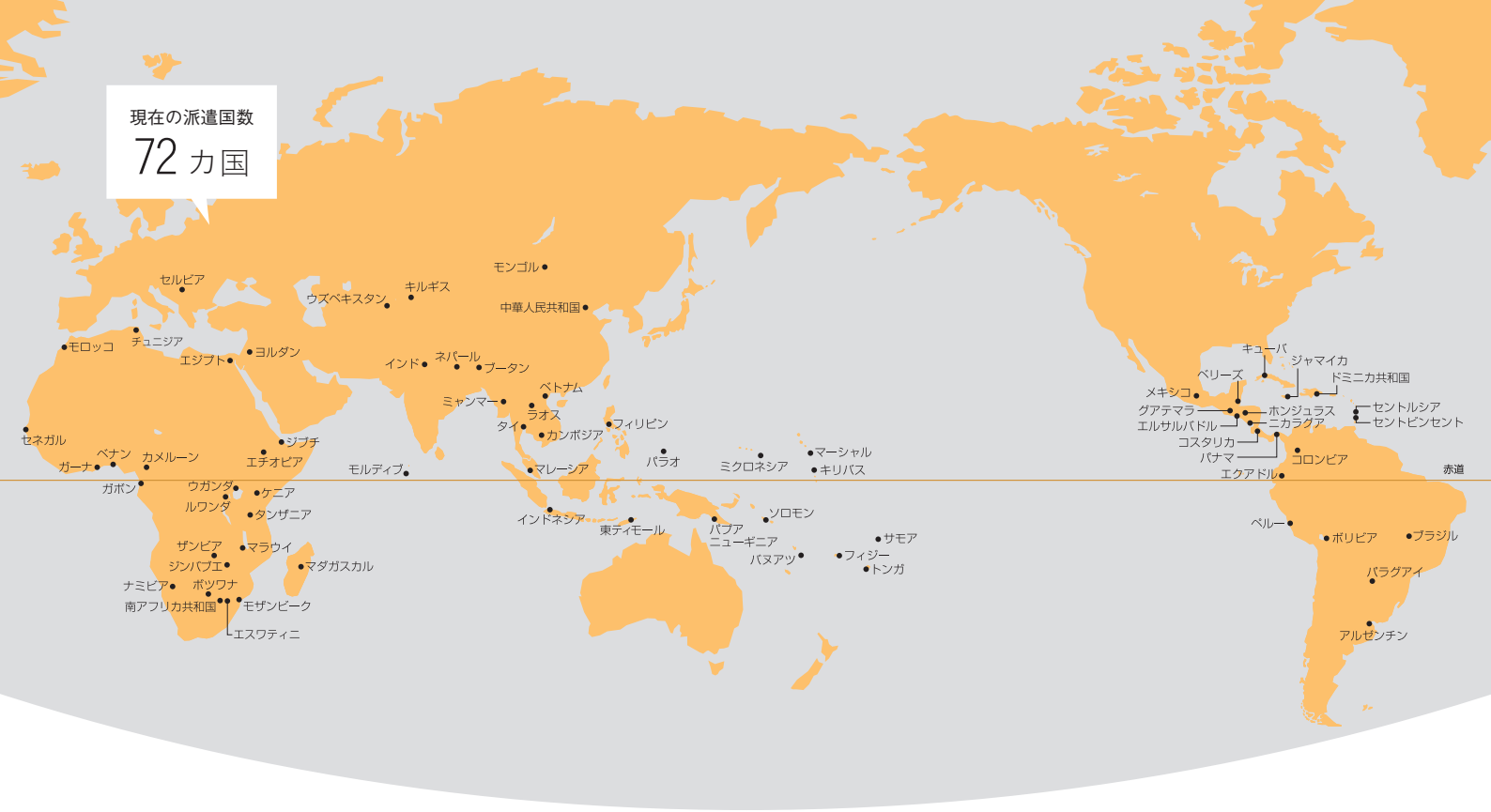
9

2020 SEPTEMBER

特集

協力隊後の生き方
～現職参加者～

派遣国の横顔
～パラグアイ～



JICA海外協力隊 派遣現況

（2020年7月末現在、単位：人）

※新型コロナウイルスの感染拡大により、派遣中隊員は全員一時帰国中です。

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	35	2
エスワティニ	1	
エチオピア	12	
ガーナ	45	
ガボン	9	3
カメルーン	20	1
ケニア	30	3
ザンビア	39	5
ジブチ	8	
ジンバブエ	8	
セネガル	29	1
タンザニア	52	2
ナミビア	11	
ベナン	26	
ボツワナ	15	
マダガスカル	24	
マラウイ	16	
南アフリカ共和国	4	3
モザンビーク	27	1
ルワンダ	27	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	18	
インドネシア	10	1
ウズベキスタン	19	4
カンボジア	15	2
キルギス	21	
タイ	15	4
中華人民共和国	5	
ネパール	27	3
東ティモール	24	
フィリピン	19	2
ブータン	13	4
ベトナム	20	6
マレーシア	13	5
ミャンマー	11	
モルディブ	7	
モンゴル	30	
ラオス	31	

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	1	
サモア	13	
ソロモン	15	1
トンガ	14	
バヌアツ	17	
パプアニューギニア	19	1
パラオ	7	5
フィジー	18	2
マーシャル	6	2
ミクロネシア	12	4

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	5	2

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	7	
チュニジア	6	
モロッコ	16	2
ヨルダン	33	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		13	5	4
エクアドル	22	2		
エルサルバドル	13			
キューバ		1		
グアテマラ	15			
コスタリカ	23	5		
コロンビア	12	4		
ジャマイカ	15	2		
セントビンセント	3			
セントルシア	6			
ドミニカ共和国	26		3	
ニカラグア	2			
パナマ	13	2		
パラグアイ	23	2	5	2
ブラジル			48	4
ベリーズ	12			
ペルー	27	4		
ボリビア	26			
ホンジュラス	19			
メキシコ	2	5		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 （男性／女性）	1,184 （497／687）	112 （85／27）	61 （22／39）	10 （5／5）	1,367 （609／758）
累計 （男性／女性）	45,776 （24,302／21,474）	6,553 （5,298／1,255）	1,542 （597／945）	547 （252／295）	54,418 （30,449／23,969）

一般＝青年海外協力隊／海外協力隊
シニア＝シニア海外協力隊
日系一般＝日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊
日系シニア＝日系社会シニア海外協力隊

クロスロード

2020 SEP

Contents

4 **JICA Volunteers' Reports**
▶一時帰国後に、メールなどを利用し、大学の正規授業として日本語指導を継続（パプアニューギニア）
▶オンラインでの環境教育を企画。環境教育隊員と隊員OB・OGの取り組み（日本）

派遣国の横顔
～パラグアイ～

6 **日系人支援**
羽石 瑛さん（日系社会青年ボランティア／日系日本語学校教師・2017年度派遣）

8 **保健・医療**
村上奈々美さん（看護師・2017年度2次隊）

特集
協力隊後の生き方
～現職参加者～

10 **Education**
河田理江さん（ベナン・小学校教育・2015年度1次隊）

12 **Medical**
田山美由紀さん（モンゴル・看護師・2015年度1次隊）

14 **Business**
松田孔佑さん（タンザニア・コミュニティ開発・2014年度1次隊）

16 **Business**
永田 彰さん（ラオス・コンピュータ技術・2015年度1次隊）

18 **私の引継書**
原 さつきさん（エチオピア・コミュニティ開発・2017年度3次隊）

20 **"失敗"から学ぶ**
玉田健一さん（タイ・青少年活動・2017年度2次隊）

22 **希少職種図鑑**
▶フェンシング　宮田結以さん（コスタリカ・2017年度4次隊）
▶学校保健　桒山瑠美さん（ガーナ・2017年度1次隊）

24 **JICA Volunteers' Before ▸ After** ～人生を変えた2年間～
クラフトビール醸造者　森本 宝さん（モザンビーク・農業土木・2014年度4次隊）

26 **帰国後よもやま話**
障害児・者支援隊員篇

28 **Pick Up OB・OG会**
▶全国OV教員・教育研究会
▶ルーマニアOB会

30 **JICA海外協力隊的プチテクガイド**
改善の方法／手洗いの啓発活動／収入向上活動

32 **先輩隊員のシューカツ記**
金秀バイオ株式会社社員　喜久里達也さん（ボリビア・空手道・2016年度3次隊）

33 **JOCV SPORTS NEWS**

34 **JICA海外協力隊のつぶやき**
お題：「通勤」

35 **INFORMATION**

36 **隊員めし**
酸っぱ辛い野菜のソース 東ティモールの「アイマナス」

■職種別索引

	掲載ページ
コミュニティ開発	14、18
コンピュータ技術	16
農業土木	24
青少年活動	20
環境教育	4
サッカー	33
フェンシング	22
空手道	32
日本語教育	4
小学校教育	10
日系日本語学校教師	6
看護師	8、12、36
学校保健	23
障害児・者支援	26

■国別索引

	掲載ページ
エチオピア	18
ガーナ	23
コスタリカ	4、22
サモア	33
タイ	20
タンザニア	14
パプアニューギニア	4
パラグアイ	6、8、36
東ティモール	36
ベナン	10
ボリビア	32
モザンビーク	24
モンゴル	12
ラオス	16
ルーマニア	29

■出身都道府県別索引

	掲載ページ
青森県	12
栃木県	6
埼玉県	18、33
千葉県	14
神奈川県	23
岐阜県	22
京都府	10
兵庫県	20
広島県	16
徳島県	8
愛媛県	24
沖縄県	32

【凡例】

JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2019年度3次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

JICA海外協力隊の種類（呼称）は、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。特に明記されていない場合は「青年海外協力隊」となります。

本誌は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：（株）AND
レイアウト：（株）AND
印刷・製本：弘報印刷（株）

JICA Volunteers' Reports

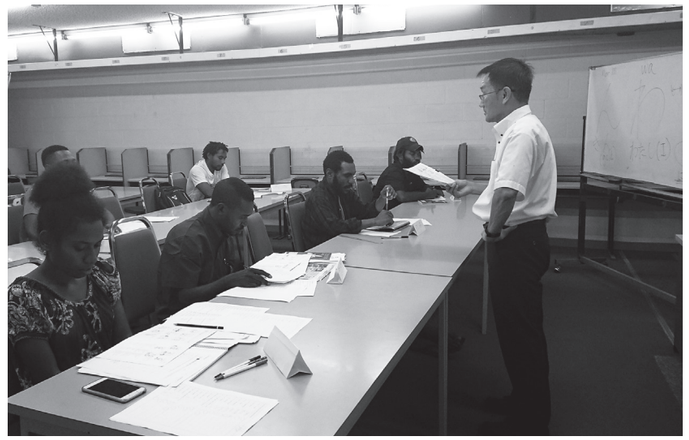
JICA海外協力隊とその経験者による国内外での注目の活動をご紹介します。

PNG Japan

一時帰国後に、メールなどを利用し、大学の正規授業として日本語指導を継続

文 ＝ 村瀬正則（むらせまさのり）さん（シニア海外ボランティア／パプアニューギニア・日本語教育・2018年度3次隊）

※派遣名称は派遣当時のものです。



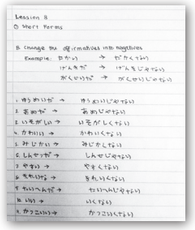
新型コロナウイルス感染症が拡大する前のパプアニューギニア大学での日本語授業風景

支援活動の流れ	
〈2020年2月〉通常前期開始	前期後期の2期制で、年間授業は24週。
〈3月〉一時帰国	新型コロナウイルスの影響で日本に一時帰国。
〈3月〉メール指導開始	配属先大学の許可を得て、メールでの指導を継続。
〈3月〉大学休校	配属先が休校に。大学の通信環境が使えなくなる。
〈5月〉大学再開	大学の通信環境が改善。多くの授業がオンラインに。
〈7月〉前期試験	前期試験の成績提出。
〈8月（予定）〉後期開始	オンライン会議システムを使った授業を検討中。
〈10～11月（予定）〉後期試験／成績提出	成績が確定。

2019年1月から、首都にあるパプアニューギニア大学人文社会学部の言語学科で、日本語プログラムの運営と授業を担当しています。ここは同国で最も優秀な学生の集まる総合大学です。しかし、大学には現地人日本語教師がいないため、その育成が私に与えられた大きな課題です。同大学は、日本の琉球大学、早稲田大学との留学提携があり、毎年1～3人が日本へ留学しています。

20年の授業は2月下旬に通常通り始まりました。初心者クラスは30人が登録し、学習を始めて2年目のクラスは7人が1年目から継続し、人間関係ができたので笑いが絶えない授業になっていました。そのほかに、3人の日本留学経験者がいるクラスもあります。

3月下旬、新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大を受け、私が一時帰国した後、すぐに大学も休校閉鎖になりました。配属先の許可を得て、正規の授業としてメールで日本語指導を継続。大学は、メールでの指導による今年の単位認定を許可してくれています。当初、メールを見ることも容易ではない学生もたくさんいました。寮や自宅ではインターネット環境がない学生もいます。モチベーションの低下もあり、課題をメールで提出する学生はごくわずかでした。しかし、5月の大学再開後、返信する学生が増加しました。大学のインターネット環境が改善され、他授業もオンラインが多くなったそうです。



学生が送ってきた解答。PCやスマホで日本語の入力ができない学生も多いので、ノートの写真が送られてくる。書き間違いも多いため、見直しをするように指導している

メールでの指導は時間がかかります。ひとりひとり英語で添削し、「教科書の○○ページを復習しなさい」という指示もします。対面一斉授業であれば、ひとりの学生の答えから他学生も学ぶことができますがメールではそうはいきません。一方で、メール指導にもいいところがあります。誤答に時間をかけ、間違いの原因を指摘し、必要な復習箇所を教えられます。オンライン会議システムを使った授業も検討していますが、メールによる適切な指導を徹底することにも意義があると感じています。

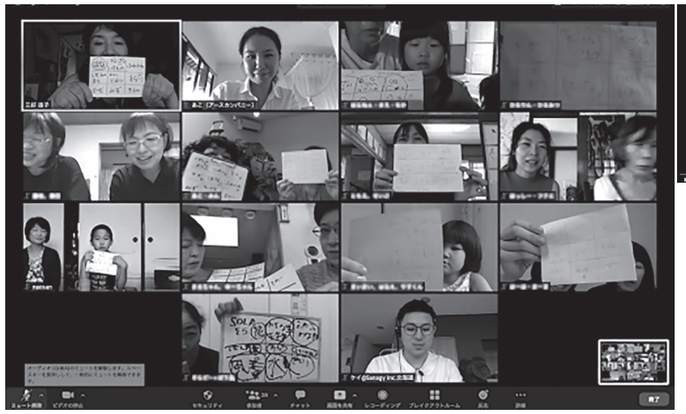
7月は前期テストがありました。この成績で留学できる学生を推薦します。今年の留学は中止になるかもしれませんが、来年は再開されることを願っています。現地にいないため残念ながら日本語学習者は減ってしまいましたが、日本留学等の目標を持って頑張っている学生もいます。大学側もオンライン指導に理解を示してくれており、11月の成績提出まで、試行錯誤をしながら丁寧に指導を続けます。

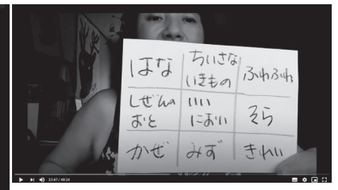
新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、後任の派遣は決まっていないので、このままでは、21年の大学の日本語講座が中断してしまいます。同大学の学生に教材の提供や学習の助言であれば、21年も続けていきたいと思っています。

Japan

オンラインでの環境教育を企画。環境教育隊員と隊員OB・OGの取り組み

文 ＝ 藤本亜子（ふじもとあこ）さん（コスタリカ・環境教育・2012年度2次隊）





上：「ネイチャービンゴ」を紹介する三好技術顧問
左：ビンゴゲーム後に答えを見せ合い、理由を共有する参加者たち

世界をつなぐオンラインならではの環境教育をぜひ試してほしい。
当日の詳細はこちら▶https://operationgreen.info/eco_at_home_report_07/

新型コロナウイルス感染症の影響で自粛生活が続く中「オンラインで環境教育はできないのか?」と考えていた。そこで、JICA海外協力隊技術顧問（担当分野：環境教育）の三好直子（みよしなおこ）さんと菊池佳（きくちけい）さん（ケニア・環境教育・2007年度4次隊）に相談したことから「お家でできる環境教育」企画は始まった。すでに菊池さんがオンラインで「お家で自然探し」というアクティビティを実施した経験があるということで、私も体験することに。このアクティビティは、「家の中の自然を探す」というお題をもらった参加者が、10分ほど家の中で自分なりの答えを探し、それを見せ合って選んだ理由を共有する、というものだ。探している間、私は久しぶりに自分の感性を使って家の中を歩き回った。

環境教育には、ゴミの分別指導のような実用的なものや、環境問題について知識として学ぶものなどいろいろな活動がある。「自然探し」は「なぜ環境を守るのか?」を直感的に理解し、感性を育てるものであると感じた。感性を育てることは、人を育てる基本の教育でもある。自閉生活中の今「自然を探す」は家でできる環境教育だと確信し、これを「お家でできる環境教育」企画として、発展させていくことにした。

内容をブラッシュアップするため、環境教育分野の隊員たちが集まるFacebook（以下、FB）グループ「JOCV環境教育」で、一緒に企画を考えてくれるメンバーを募ると、さまざまな隊次の隊員や一時帰国中の隊員が関心を示してくれた。すぐに「自然探し」体験会を実施し、感想や意見をもらうことで、企画を形にしていった。

同時期、私が働くアース・カンパニーでは、環境・社会に負荷のない組織運営を支援するOperation Green事業の一貫で、エコに関する連続勉強会を企画していた。「お家でできる環境教育」を紹介するにはベストなタイミングだと思い、勉強会で実践することにした。

当日は、三好さんと菊池さんを講師に、20人の小学生などを対象に実施。今回は、9つのテーマで自然を探すビンゴ形式で「自然探し」を実践した。お題は「小さな生きもの」「ふわふわ」など9つ。「小さな生き物は納豆!」「とうもろこしのヒゲがふわふわ」など、たくさんの自然との出会いがあった。オンラインならではの面白さは、お題の「空」でも感じられ、異なる場所にいる参加者がいろんな空をシェアした。実施後の参加者のアンケートでも今回のアクティビティは非常に好評だった。

今回の企画で隊員のネットワークは、帰国後・活動中の隊員が新しいものを一緒につくり上げていくことができる貴重なつながりだと改めて確信することができた。今後もFBグループを通じて隊員たちに呼びかけ、一緒に新しい環境教育や学びの機会をつくり上げていきたい。

プロフィール●2012年、青年海外協力隊員としてコスタリカに赴任。14年に帰国。その後、国連大学と環境省が共同運営する地球環境パートナーシッププラザで持続可能な開発の為の教育（ESD）全国事業の事務局で4年間務めた。19年から一般社団法人アース・カンパニーにて人材育成事業としての研修をインドネシアバリ島を拠点に担当。

派遣国の横顔

JICA海外協力隊の派遣国ごとに、それぞれの代表的な職種・分野の活動例を、任地の文化や様子と共に紹介します。

パラグアイ

Field 1 日系人支援

日系人の子どもたちにそれぞれのレベルに合った日本語教育を実施

パラグアイの首都で暮らす日系人の子どもたちへの日本語教育に取り組んだ羽石さん。彼らの間に日本語に触れる機会に差があるなか、それぞれの日本語力に応じた授業運営の方法を見つけ出していった。

はねいし　あきら
羽石 瑛 さん
（日系社会青年ボランティア／日系日本語学校教師・2017年度派遣）

PROFILE

1987年生まれ、栃木県出身。兵庫教育大学で小学校の教員免許状を取得。兵庫県南あわじ市立の小学校に教員として勤務した後、2017年6月に日系社会青年ボランティアとしてパラグアイに赴任（現職教員特別参加制度）。19年3月に帰国し、復職。

活動概要

アスンシオン日本人会が運営するアスンシオン日本語学校（アスンシオン市）に配属され、主に以下の活動に従事。

●日本語授業の実施
●図書室の運営支援

※派遣名称と職種名は派遣当時のものです。

羽石さんが配属されたのは、首都アスンシオン市の日本人会が運営するアスンシオン日本語学校。幼稚園や小・中学校に通う子どもたちが、放課後や休日に日本語を学びに来る「塾」のような教育機関だ。当時同市では、約600世帯の日系人が暮らし、そのうちの約250世帯が日本人会に所属。羽石さんの配属先に通うのはその子弟たちで、在校生は130人ほどだった。教員は15人。羽石さんは任期中、以下のクラスの日本語授業を担当した。平日のクラスは週に3日、1日3コマずつ授業があり、土曜日のクラスは1日5コマだった。

【2017年度】
■平日　小学2年生のクラス（2人）
■土曜日　中学1年生のクラス（8人）

【2018年度】
■平日　小学1年生のクラス（2人）と6年生のクラス（2人）。両クラスの授業を同じコマに同じ教室で行う「複式学級」。
■土曜日　小学1年生のクラス（14人）

対象は日系3世や4世

パラグアイへの日本人の移住が本格化したのは1950年代。現在は約7000人・2000世帯の日系人が8カ所の移住地やアスンシオンなどの都市部で暮らす。各地の日本人会はこれまで、それぞれ日本語学校を持ち、日系人子弟を対象とした「継承日本語教育」を行ってきた。継承日本語教育とは、日本語力の向上だけでなく、その背景にある文化の継承やアイデンティティの形成をも目的とした教育だ。

羽石さんの配属先では、日本の学校で使われる日本語母語話者*のための「国語の教科書」を主な教材としながら継承日本語教育が行われていた。しかし、同じ年代でも子どもによって日本語力の差が大きく、すべての子が国語の教科書での学習に付いていけるわけではなかった。在校生の中心は日系3世や4世で、家族ともスペイン語で会話をし、日本語に触れる機会がほとんどないという子が多かった。しかし、なかには親が日本語の勉強の面倒をよく見ている、あるいは祖父母とは日本語で会話をしているといった事情から、ある程度の日本語力を持つ子もいた。そうした状況のなかで羽石さんは、教え子たちの日本語力に応じて授業の進め方に変化を付けるよう努めた。

【平日の授業】

週に3日通う平日のクラスの子どもは、おしなべて親が我が子の日本語力を向上させることに熱心であり、日本語力も高かった。そこで、平日のクラスでは日本の学校で行われているのと同様の授業を実施。教科書に掲載されている文章の音読や解釈などである。17年度に担当した2年生のクラスの子どもたちは日本語力が高かったことから、「日本語を使いながら理科の実験を行う」といったアクティビティも取り入れた。

複式学級の運営は羽石さんにとって初めての経験で、当初は要領をつかむのに苦労した。しかし、担当した1年生のクラスの2人の日本語力が高いとわかったことから、同じコマで教える6年生との間でコミュニケーションをとる時間を設けるなど、複式学級であることを生かすようにした。

【土曜日の授業】

土曜日のクラスは読み書きができない子も多く、18年度に担当した小学1年生のクラスは一切できない子が大半だった。そうしたなかで羽石さんは、国語の教科書に出てくる「ひらがな」「カタカナ」「漢字」の習得を授業の目標に設定。時折「歌」や「折り紙」、「読み聞かせ」、「お店屋さんごっこ」など楽しめるアクティビティを取り入れることで、日本語に対する興味の喚起や日本語を聞き取る力の向上に努めた。

図書室の「断捨離」を敢行

羽石さんが活動を進めるなかで感じていたのは、自身が大学で心理学を学んだこと、およびそれをベースに小学校教員として授業運営の技術を蓄えていったことが、すべて生きているということだ。子どもへの声がけの手法などは、日本の子どもを相手にしたときに効果的だったものが、パラグアイの日系人が相手であっても同じように効果的だったのだ。心残りだったのは、同僚教員たちの大半が教育に関する専門知識を学んだことがなかったにもかかわらず、それを伝えるチャンスが見つけられなかったことである。「伝えたら有益だろう」とは思ったものの、彼らはダブルワークなどで多忙であり、時間を割いてもらうのをためらってしまったのだ。

一方、学習環境の改善については貢献できたこともあった。図書室の改善だ。羽石さんは任期中、校務分掌としてほかの同僚教員と共に図書室運営を担当。着任当時、配属先には日本語の蔵書が3000冊ほどあった。しかし、日系1世が日本から持参した本などは、カビが生えたり朽ちたりして読む気が起きず、衛生上の問題も懸念されるものが多かったため、図書室がほとんど活用されていなかった。そこで羽石さんは思い切った「断捨離」を提案。蔵書の半数ほどを廃棄したうえで、残した蔵書は分類して並べ、シンプルで使いやすい図書室にした。すると、「図書室で本を選び、読む時間」を設けるなど、教員たちの間で図書室を活用する機運が生まれたのだった。

❶小学1年生（左の2人）と小学6年生（右の2人）を複式学級で担当したコマでは、一方に自習をさせながら他方で座学を行うというやり方を基本としつつ、ときに両者がコミュニケーションをとる時間も設けた
❷担当した「書道」の特別授業では、漢字への興味を持ってもらうべく、漢字を自由にデザインするアクティビティも行った
❸図書室の「断捨離」をした後、羽石さんは図書室で好きな本を選んで読む時間を授業に取り入れた

*日本語母語話者…日本語を母語（幼少期から自然に習得する言語）とし、実際に使う人。

任地ひとロメモ
〈アスンシオン〉

アスンシオン市はパラグアイの首都で、周辺の市と共に人口約250万人の首都圏を形成する。16世紀にスペイン人によって建設された古都であり、旧市街には植民地時代のコロニアル建築が多く残されている。

道端の薬草売り。薬草はすりつぶし、テレレ（先住民のグアラニー族の伝統的な飲み物であるマテ茶を冷水で淹れたもの）に入れて飲む。

Field2
保健・医療

村上奈々美（むらかみ なな み）さん
（看護師・2017年度2次隊）

PROFILE

1990年生まれ、徳島県出身。大阪市立大学医学部看護学科を卒業後、看護師として淀川キリスト教病院に約4年間勤務。2017年9月に青年海外協力隊員としてパラグアイに赴任。19年9月に帰国。現在は大阪市立大学医学部看護学科に公衆衛生看護学の特任助教として勤務。

活動概要

ポトレロ・グアジャキ保健ポスト（カアグアス県）の家族保健ユニットに配属され、主に以下の活動に従事。

- ●高血圧や糖尿病の患者を対象とする保健指導の実施
- ●妊婦教室の運営支援
- ●幼稚園や学校での保健指導の実施

生活習慣病が多いという課題の解決に向け、保健指導の活性化に注力

農村部の一次医療機関に配属された村上さん。食生活が主要因と考えられる「生活習慣病が多い」という課題に対し、治療や予防に関する啓発活動の活性化に取り組んだ。

村上さんが配属されたのは、人口約3000人の農村地域を管轄する一次医療機関。医師1人、看護師3人、歯科医師1～2人が配置されており、週に3日は外来診療を、2日は巡回診療や地域での啓発活動を行っていた。外来患者は1日30人ほどだった。

課題は「生活習慣病」

配属先の患者で特に多かった疾患は、高血圧や糖尿病を中心とする生活習慣病だ。主な要因と見られたのは、現地の食生活である。スペインの支配を受けた歴史を持つ同国の食事は、マンディオカ（キャッサバ）やトウモロコシを使った先住民のグアラニー族の料理と、パスタやライス、トルティージャ（小麦粉にチーズや卵、塩を混ぜて揚げたもの）やエンパナーダ（小麦粉の生地に挽肉やチーズなどを詰めて揚げたもの）など、スペインからもたらされた料理とがミックスされている。一般的なのは以下のようなメニューで、野菜が少なく、糖質や脂質、塩分、タンパク質が多めだ。そうした栄養の偏りが、生活習慣病の多さの背景にあると見られた。

【朝食】 チーパ（マンディオカ粉でつくるチーズ入りのパン）とコシード（グアラニー族の伝統的な飲み物であるマテ茶に砂糖とミルクを加えたもの）。

【昼食】 肉入りのソースをかけたパスタかライスと、ふかしたマンディオカ。

【夕食】 トルティージャ、マリネラ（肉入りのトルティージャ）、エンパナーダなど。

【間食】 各食事の間に、テレレ（冷水で淹れるマテ茶）を飲みながら軽食をとる。

【その他】 週末には、ごちそうとしてアサード（焼肉）を楽しむ。

配属先では以前から、高血圧と糖尿病の患者を対象とする保健指導を実施していた。「生活習慣病クラブ」と名付けた取り組みで、月に1回、配属先の待合室に対象患者を集め、栄養や運動に関する30分ほどの講習を行うものだ。しかし、村上さんが着任した当時、参加者の数は少なく、講習も視覚教材などを使わず、ただ話をするだけのわかりづらいものとなっていた。そこで村上さんは、着任して3、4カ月経ったころから、生活習慣病クラブの改善に力を入れるようになった。

【教材やアクティビティの導入】 脳血管疾患など生活習慣病による合併症のメカニズムを説明する際には、体内の絵を描いたポスター教材を使用。任期の半ばにプロジェクターが使えるようになってからは、スライド教材や動画教材も活用するようになった。また、参加者の興味を引き出すため、体操やクイズ、塩・砂糖・野菜の量の測定といったアクティビティも取り入れていった。

【参加の促進】 当初の参加者は30人程度。配属先を受診している高血圧と糖尿病の患者はもっと多かったことから、同僚と対策を話し合った結果、「次のクラブの日の分までしか薬を渡さない」という対策案が医師から出され、実行されることになった。するとまもなく、参加者は倍以上に増加した。

【年間計画の導入】 当初はその都度講習の内容を決めていたが、村上さんの任期の半ば過ぎに始まった2019年は、各回にどのような内容の講習を行うかをあらかじめ決めておく「年間計画表」を作成。教材作成など事前の準備を計画的に進めることができるようになった。

村上さんの任期終盤、継続的に参加してきた患者を対象に、クラブによる意識の変化を尋ねるアンケートを実施した。すると、回答者の7割が「クラブには意義があると感じる」と回答し、一定の効果があるクラブとなっていることが確認できた。

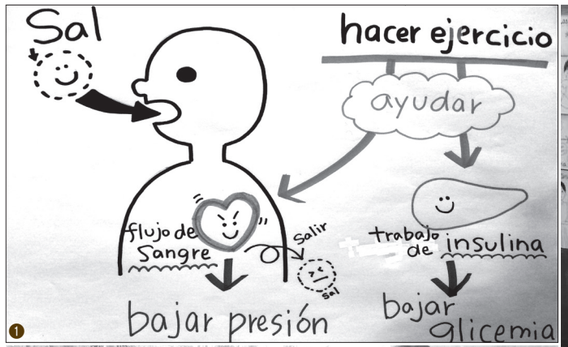
新たなクラブを試行

より広い範囲の人を対象に生活習慣病の治療や予防のための保健指導を行うため、村上さんは任期の半ば近くになると、新たな「クラブ」の立ち上げを試みるようになった。その1つが「体操クラブ」。診療日の待合室で診察を待っている患者を対象に、週3回、椅子に座ったままでできるストレッチ体操を指導した。体を動かすきっかけをつくることを目的としたものだ。

新たに立ち上げたもう1つのクラブは「ウオーキングクラブ」。週2回、外来診療が終わった直後に20～30分、近所でウオーキングを行った。参加者は、生活習慣病クラブのメンバーや外来患者の有志だ。しかし、参加者の確保が思うようにできなかったことから、村上さんは同僚たちに対策を相談。すると、「ここの人たちは踊ることが好きだ」というアドバイスを受けたため、今度はフィットネスを目的としたダンスの「ズンバ」を踊る「ダイエットクラブ」を立ち上げてみた。すると、ダイエットに意欲を持つ数人が継続して参加するようになり、やがてウオーキングクラブを廃止して活動日を週5回に増加。時間は、外来診療や巡回診療が終わった後の20～30分だ。

こうして配属先での保健指導の活性化を進めた村上さんだが、悩みの種だったのは、村上さんの手によって活性化した保健指導を、どのようにすれば自身の帰国後、同僚たちに継続してもらえるかという点だ。当初、生活習慣病クラブの企画や教材の準備、実施などをすべて村上さんが進めていったところ、同僚たちに「保健指導は協力隊員がやってくれるもの」という意識を持たせてしまった。「村上さんはわかりやすいポスターをつくるのが上手だ」と評判になったが、それによって彼らは「自分も教材づくりに挑戦する」と申し出てくれるわけではなく、それどころか、「自分の子どもが学校で出された制作物の課題を手伝ってほしい」などと求めてくるような有様だったのだ。

「人間関係づくりのためなら」と考え、最初はそうした依頼も引き受けていたが、同僚たちに一向に変化が見られなかったことから、村上さんは方針を転換。「私はグアラニー語の力が足りないので、あなたたちの助けが必要」と言って彼らに助力を求めてみた。するとようやく、生活習慣病クラブでの講習などは彼らが「自分事」として取り組んでくれるようになったのだった。



❶生活習慣病クラブの講習のために村上さんが作成したポスター教材。運動には血糖値や血圧を下げる効果があることを図解している
❷村上さんのホストファミリーの昼食風景。肉入りのソースをかけたパスタや、ふかしたマンディオカが並ぶ。一日でもっともボリュームのある現地の典型的な昼食だ

配属先の待合室で行った生活習慣病クラブの運動指導の様子

任地ひとロメモ
〈ポトレロ・グアジャキ〉

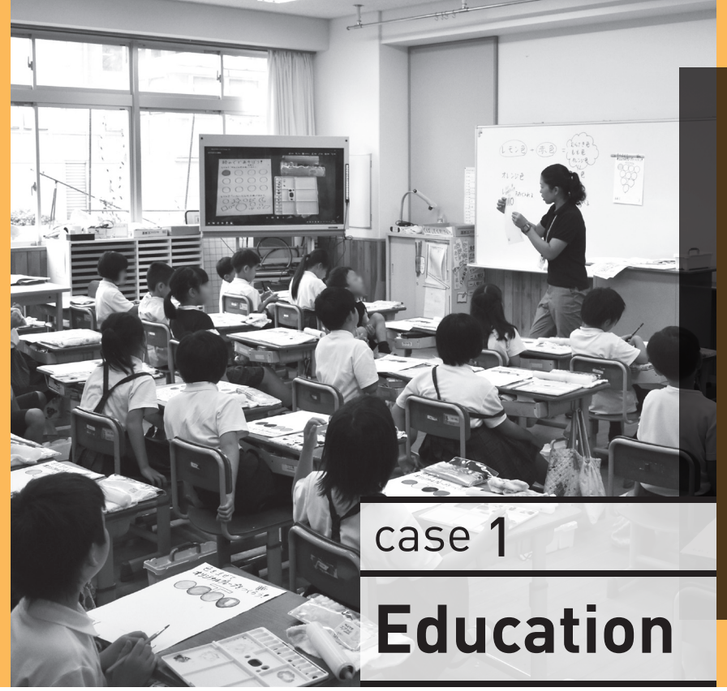
パラグアイ南東部、首都アスンシオンからバスで4時間ほどの距離にある町。赤土の道がどこまでも延びる農村地帯だ。

左：グアラニー族の伝統工芸であるニャンドゥティという刺繍
右：ニャンドゥティでつくったドレス

特集

協力隊後の生き方
～現職参加者～

勤務先に籍を残したままで協力隊に参加する「現職参加」。本特集では、協力隊に現職参加した後、派遣前の所属先に復職している方々に、協力隊経験が自身の仕事の力や姿勢にどのように影響しているかを伺った。



case 1

Education

復職後に受け持った小学2年生のクラスで図工授業を行う河田さん

京都市立開睛小中学校 教諭

河田理江さん

（ベナン・小学校教育・2015年度1次隊）

協力隊時代に現地教員から学んだ「心のゆとり」の大切さ

京都市の公立小学校教諭として協力隊に現職参加した河田さん。ベナンの教員たちから「心のゆとりの大切さ」を学んだことで、復職後、「子どもたちの可能性を引き出すために何ができるか」をじっくり考えることができるようになった。

――協力隊の任期を終えて復職した後、これまでに担当してきた業務をお教えください。

派遣前に勤務していたのとは違う京都市立開睛小学校に復職し、まずは2年生の学級担任となりました。同校は20ー1年に同市立開睛中学校と共に一貫教育を行う学校として設立されたのですが、復職した翌年度の18年度には、小学課程と中学課程を一体化した「義務教育学校」に移行しました。それと同時に私は学級担任から外れ、小学課程にあたる「前期課程」の研究主任となり、現在に至ります。

――研究主任の役割とは？

学校全体の教育の質を高めていく取り組みを担当するポストです。例えば、ある先生が行う授業をほかの先生たちが見学する「公開授業」を開催し、事後の研究会で板書や発問など授業の手法に関するアドバイスをすることなどが、典型的な仕事です。

――協力隊を経験したことで、教員としての働き方に影響はあったのでしょうか。

心のゆとりを持つことを覚え、穏やかな気持ちで働けるようになったことが大きいと感じています。日本の小学校は分刻みでスケジュールが決まっており、子どもだけでなく、先生も常に時間に追われています。そのため、私も派遣前は心のゆとりが持てず、時間どおりに動かない子など、しつけが難しい子どもを叱ってばかりいるような状態でした。そんななか、ベナンで共に活動した小学校の先生たちのおおらかさに接したことで、「そんなにしつけにこだわらなくても良いのではないか」と考えることができるようになりました。始終、音楽を流して子どもたちと踊るなど、彼らの時間の流れにはゆとりがありました。「もっと子どものしつけをすべきだ」という私の意見に対し、「そんなこと、気にする必要はあるの？　いろいろな子がいるのに」と言われ、考えさせられたこともあります。そうした経験から、帰国後、細かなしつけにこだわらずに働いてみると、以前より広い視野でひとりひとりの子どもの違いに目を向け、それぞれの可能性を引き出すために何ができるかをじっくり考えることができるようになったと感じています。

――「心のゆとり」は、具体的にどのような形で仕事に表れてきましたか。

復職後に小学2年生の学級担任をした際は、1年生で習ったはずのことが理解できていない子がたくさんいました。そうした子どもに対し、「この子にはどういう言葉がけがより合っているのか」について、以前よりよく考え、実践するようになりました。研究主任となってからは、校内で前例のなかった「学び直しの時間」という取り組みの導入を提案し、実現できたのですが、これを発案できたのも、「子どもたちの可能性を引き出す方法」をじっくりと考えられるようになったからだと感じています。

――「学び直しの時間」というのはどのようなプログラムでしょうか。

算数と数学につき、子どもたちの習熟度別にクラスを再編したうえで、前の学年で習った内容で復習しておいたほうが良いものを各クラスの習熟度に合わせてピックアップし、その授業を補講として行うものです。実施の頻度は各学年で週に1コマずつで、子どもたちの理解が確実になるよう、ほかの学年の先生にも参加してもらい、マンツーマンに近い形での指導となるようにしています。「学習したことが定着しにくい子が減らない」という課題を解決するため、そういう子どもたちに「勉強が理解できて楽しい」と感じてもらう取り組みをしなければという課題意識が、企画の端緒です。学級担任の先生たちからは「あの子はこれが理解できるようになってきた」といった報告をもらい、子どもたちからも学び直しの時間を楽しみにしている様子が窺える声が聞かれるなど、意義の高さを感じている取り組みです。

――今後の抱負をお聞かせください。

学校は子どもにとって、起きている時間の大半を過ごす場です。だからこそ、子どもたちには「しつけを受ける苦痛の場」ではなく、「自分の良さを発見できる楽しい場」であってほしいというのが、私の思いです。そうした場にするためには、先生たちに「心のゆとり」が必要だというのが、私の協力隊での学びです。それを多くの先生たちに知ってほしい。私は今後、研究主任を続けるだけでなく、管理職になってもおかしくない年代に差し掛かっています。そうした立場に立ったときに、ベナンの先生に言われた「そんなこと、気にする必要はあるの？」といった言葉を先生たちにかけ、子どもたちの成長を広い視野で考えられるサポートをしていくのが、協力隊に参加した私の役目だと考えています。C

＊義務教育学校…9年間にわたる義務教育課程を一貫して行う学校。学校教育法の改正で2016年に新設された制度。「6・3制」以外の学年の区切りが可能になるなど、一貫教育のメリットを生かすための柔軟な措置が可能となっている。

COMPANY PROFILE

京都市立開睛小中学校

創　　立：2011年
在校生数：約800人（全9学年、2020年8月現在）
所　在　地：京都府京都市
事業内容：小中一貫型の小・中学校として開校し、2018年度から義務教育学校に移行

PROFILE

かわた・りえ

1979年生まれ、京都府出身。大学卒業後、京都市立の小学校に教諭として11年間勤務。2015年7月、青年海外協力隊員としてベナンに赴任（現職参加）。17年3月に帰国し、京都市立開睛小学校（18年度から開睛小中学校に移行）の教諭として復職。小学2年生の学級担任を経て、18年度から研究主任を専任で務める。

協力隊活動

ベナン幼児・初等教育省の地方出先機関であるグランボボ視学官事務所（モノ県グランボボ市）に配属され、同市の小学校を巡回して体育や図工の授業の質向上支援に取り組む。任期中、現地で手に入る材料を使った図工授業のアイデアをまとめた教員用指導書『CHIEBUKURO』を他隊員と共に作成。写真は、授業で制作した図工作品を手にする巡回先の学校の児童たちと。

京都市立開睛小中学校
学校長

Yamashita Kazumi
山下和美さん

VOICE from the COMPANY　JICA海外協力隊経験をこう見る

子どもの可能性を引き出す構え

私は河田の復職時から現在まで、校長という立場で共に働いてきました。彼女の仕事ぶりを見ていて特に強く感じるのは、学習が遅れている子への目配りです。そうした子が勉強への意欲を回復する方法として、前例のなかった「学び直しの時間」を研究主任として企画してくれたのは、その表れの1つだと思います。ベナンでは、物が十分にないなかで図工や体育の授業を進めていく方法を見つけることに取り組んだと聞いています。学びに飢えている子どもたちに身を持ってかかわり、彼らの可能性をなんとか引き出そうとしてきた経験が、現在の仕事の基盤になっているのではないかと推察します。

彼女が教師として追い求めていることに間違いはありません。今後もそれを貫き通し、その姿によって周囲の先生たちに影響を与え続けていってくれればと期待しています。

case 2

Medical

勤務する外科病棟にて

独立行政法人国立病院機構
仙台医療センター 看護師
田山美由紀さん
（モンゴル・看護師・2015年度1次隊）

協力隊経験で自分の核と気づいた「相手の立場に立って」という姿勢

病院の看護師としての籍を残しながら、協力隊に現職参加した田山さん。異文化社会での活動を通して、「自分は看護師として何を大切にしたいか」に気付いた経験が、帰国後の仕事のベースになっているという。

――協力隊の任期を終えて復職した後、これまでに担当してきた業務をお教えください。

当院は病床数が698床という大きな病院で、派遣前は集中治療室に勤務していたのですが、復職時から現在までは外科病棟に配属されています。入院されているのは、がんの治療を受けている方や手術前後の方が中心です。

――派遣前とは異なる病棟で再スタートされたとのことですが、苦労はなかったのでしょうか。

異文化社会での協力隊活動はうまくいかないことばかりでしたが、それでもがんばって任期をまっとうしたことで、「自信が付いた」と感じて帰国することができました。ところが、復職するとすぐ、仕事の忙しさで協力隊が遠い昔のことのように感じられるようになってしまいました。しかも、慣れない病棟の仕事で手際良く働けない日が続いたため、協力隊経験で得たはずの自信も失われていきました。自尊心をなんとか回復できたのは、JICA東北や職場からお声がけいただき、看護学生や高校生に協力隊経験をお話しする機会を得たからです。そのときに協力隊時代の経験を思い起こし、「2年間、活動も生活も必死にやってきた。そこで得たものを生かさなければ」と奮起することができました。

――ご自身が協力隊経験で得たものは何だったと感じていらっしゃいますか。

自分が看護師として何を大切にしたいのかを自覚できたことが、一番大きいと感じています。具体的には、単純なことなのですが、「患者の立場に立って」という姿勢です。派遣前は、それを自分が大切にしたいと思っているかどうかを考えたことはありませんでした。一緒に働く日本の看護師たちは、こうした姿勢が当たり前だからなのだろうと思います。ところが、モンゴルでは「相手の立場に立って」という姿勢が感じられない看護師が少なくありません。同国では日本と違って、患者の体を拭いたりする「日常生活援助」は看護師の役目ではないとされていることもあり、患者の体位を変えて床ずれを防ぐなど、入院患者の合併症を防ぐための看護が配属先ではなされていませんでした。患者の苦しみを考えればやって当然のことなので、その方法を教える勉強会などを開きたいと提案してみるものの、当初は「ここではそれは必要ない」などと言われ、なかなか受け入れてもらえませんでした。そうした態度を取られるたびに、強い憤りを感じました。やがて、自分はなぜこれほど強い憤りを感じるのかを考えてみたのですが、それは私の主張を聞き入れてもらえないからではなく、私は「患者の立場に立って」という姿勢で仕事をしたいと心底思っているからなのだとの結論に達しました。そうすべきだと大学で習っただけではなく、人間としてそうありたいと思っているからなのだと。

COMPANY PROFILE

独立行政法人国立病院機構 仙台医療センター

創　　設：1937年
病 床 数：698床
所 在 地：宮城県仙台市
事業内容：宮城県の基幹病院

PROFILE

たやま・みゆき

1983年生まれ、青森県出身。大学卒業後、看護師として独立行政法人国立病院機構仙台医療センターに入職。集中治療室で8年間働いた後、2015年7月に青年海外協力隊員としてモンゴルに赴任（現職参加）。17年7月に帰国し、復職。復職時から現在まで外科病棟に勤務。

協力隊活動

2次医療機関であるドルノゴビ県総合病院に配属され、床ずれや誤嚥による肺炎など、入院患者に生じやすい合併症を防ぐ技術の指導、あるいは看護記録の運用改善の支援などに取り組んだ。写真は、現地の看護師を対象に開いた、入院患者の合併症を予防する技術に関するセミナーの様子。患者の体位変換の方法を指導している。

独立行政法人国立病院機構
仙台医療センター
病棟看護師長
Takahashi Nami
高橋奈美さん

VOICE from the COMPANY　JICA海外協力隊経験をこう見る

「リーダーシップ」が向上

田山さんとは彼女の新人時代にも共に働いていますが、当時から、疑問に感じたことは勉強し、患者さんのために努力をしていたことを覚えています。

今年の4月からまた共に働くようになったのですが、協力隊に参加した影響ではないかと感じているのは、以前のように誰よりも患者さんのことを考え、丁寧なケアを行うだけでなく、「リーダーシップ」も増したということです。共に働く看護師たちに、自分が思ったことを言葉にしてしっかり伝える一方、彼女たちの意見にも耳を傾けながら、チームリーダーとして病棟を引っ張ってくれています。物資が不十分な途上国の病院で、なんとか患者さんのために改善できることはないかと懸命に考えた経験が、視野の広がりや行動力の高まりにつながっているのではないかと推察します。

今後も変わらず、患者さんも同僚も共に慮る看護師であり続けてほしいと思います。

現在勤務する外科病棟は、集中治療室よりお話ができる患者さんが多いので、「手術が不安だ」といった悩みを聞くなど、彼らとコミュニケーションをとる時間が多くなっています。そのなかで、ときに患者さんから「ほかの看護師さんと何か違うね」と言われることがあります。派遣前に患者さんからそう言われたことはありませんでした。それはもしかすると、「患者の立場に立って」という姿勢が派遣前より強まり、知らず知らずのうちに患者さんへの接し方に表れているのかもしれません。

――看護師は「チーム」で働く仕事だと思いますが、協力隊経験によって同僚たちとの協働の仕方に変化はありましたか。

看護師たちはそれぞれ異なる考えを持っているので、年齢やキャリアに関係なく、皆が対等な立場で意見を発信し合えるような職場にするため、ひと役買おうと心がけるようになりました。協力隊経験によって自分の信念に気づき、それを貫こうと思うようになった一方、自分とは違う意見の人の話にもしっかり耳を傾けようという意識も強まったと感じています。モンゴルの看護師たちとは意見が衝突することも少なくなかったのですが、いつでも私が正しいわけではありませんでした。例えば、人員や物の不足、文化や考え方など、私がよく理解できていなかった事情を踏まえれば、「あなたが主張する改善策の優先度は低い」という同僚の意見が正しいこともあり、それを踏まえた対策を一緒に考えるようになりました。そうした経験を重ねたことで、「異なる意見にはそれぞれ理由がある」と考えられるようになったのだと思います。

――今後の抱負をお聞かせください。

協力隊経験によって、看護の技術だけでなく、「職場のあり方」についても学ぶところがあり、帰国して3年経った今、興味が湧いてきました。そのため、さらに知識や経験を蓄え、いずれは管理職の立場に立ち、職場全体としてより良い看護サービスを提供できるようにしていく仕事にも携わりたいと考えています。

case 3

Business

ダイキンHVACソリューション北海道のショールームで

ダイキンHVACソリューション北海道
株式会社 社員
松田孔佑さん
（タンザニア・コミュニティ開発・2014年度1次隊）

協力隊経験で身に付いた「先入観にとらわれない姿勢」

エアコンメーカーのダイキン工業（株）に籍を置きながら協力隊に現職参加した松田さん。異文化社会の人々と付き合うなかで身に付いた「先入観にとらわれない姿勢」が、帰国後の仕事の武器になっていると語る。

――ダイキンHVACソリューション北海道株式会社（以下、「ダイキン北海道」）の概要についてお教えください。

エアコンメーカーのダイキン工業株式会社が持つ地域販売会社の一つです。ユーザーへの直接の販売ではなく、建設会社や設備会社、あるいはそれらに卸売をする商社への販売が主な事業です。私は2007年に新卒でダイキン工業に入社し、協力隊の任期を終えた2年後に「ダイキン北海道」に出向となりました。北海道は従来、エアコンの普及率が全国平均のわずか3分の1程度だったのですが、昨年あたりから急速に市場が拡大し始めており、「ダイキン北海道」はそうしたチャンスにどれだけシェアを伸ばせるか、踏ん張りどころとなっています。

――現在担当されている業務は？

エアコンの販売や設置工事を行う設備会社へのルート営業を担当しています。また、一般社員と管理職の中間にあたる「主任」という職責を与えられており、後輩社員たちをフォローすることも業務の一つとなっています。

――協力隊に参加する以前はどのような業務を担当されていたのでしょうか。

もっとも長く配属されていたのは、「ダイキン北海道」と同じダイキン工業の地域販売会社であるダイキンHVACソリューション東京の営業部門です。主に担当していたのは、エアコンの卸売りをする商社へのルート営業です。ユーザーではない顧客へのルート営業である点で、現在担当しているのと同種の業務です。

――協力隊に参加する前と同種の業務に携わるなかで、協力隊の経験によってご自身の仕事の力に成長を感じることはありますか。

私は協力隊経験によって、「先入観にとらわれてはいけない」と自戒する意識を強く持つようになりました。協力隊活動の一つとして、任地の市場で売られているのを見たことがなかった「きのこ」の生産・販売を、同僚のアイデアで農村部の女性グループに勧めることになったのですが、私は「商売として成り立つわけがないだろう」という先入観を持っていました。ところが、実際は大変な売り上げを出せるまでになった。そうした経験により、「先入観にとらわれていると、可能性を見誤る」と自戒するようになったのですが、それが帰国後の仕事にも生きていると感じています。例えば、もっぱら家庭用エアコンの小売りをしている会社に対し、業務用エアコンの販売にも手を広げてみたらどうかと「ダメ元」で提案してみたところ、「実はそういうニーズのあるお客さんがいる」と話が進んだこともあります。協力隊に参加する前なら、「この顧客が買ってくれるのは家庭用エアコン」という先入観に囚われて、「競合他社の製品と比べると、ダイキン工業の家庭用エアコンはここが優れている」「競合他社よりこれだけお安くご提供できる」といった営業トークに終始していたことだろうと思います。

相手の背景に目を配る「視野の広さ」も、協力隊時代に養われ、今の仕事に生きているものだと感じています。協力隊時代に付き合うのは異文化社会の人たちですから、当初は彼らの行動に面食らう。例えば、特に親しくもない人からよく「お金をくれ」とせがまれたのですが、日本ではあり得ない行動であり、最初は嫌悪感ばかりでした。やがて、そう言ってくる人がたまたまお金を持ち合わせていなくて困っているのか、それとも解決できない経済的な事情からそう言ってくるのか、私は何もわかっていないことに気づく。そうして、「お金をくれ」とせがむ人の背景について、ほかのタンザニア人に尋ねるなどして正しい事情を探るようになりました。そうした経験を重ねたことで、今の仕事のなかでも、顧客の先にいる「ユーザー」にまで目を配り、多少のコストアップになってもユーザーのニーズに合致する製品の購入を提案するなどして、新たな取引が叶うといったこともあります。

――今後の抱負をお聞かせください。

北海道のエアコンの普及が急速に伸びているという「変化」の時期にあって、「ダイキン北海道」として重要なのは、先が読みきれないなかで果敢に手を打っていくことです。そうしたなかで私に果たし得る役目は、タンザニア人に学んだ「行動力」を発揮することだと考えています。きのこ栽培の着手をはじめ、彼らには「後先を考え過ぎず、果敢に行動する」という力があった。私は協力隊に参加する前は、「この仕事を提案しても、うまくいかなかったら上司に怒られるだろう。ならば提案は止めよう」と逃げることが多かった。しかし、協力隊経験によって「やってみてだめだったなら、怒られれば良い」と開き直る覚悟ができるようになりました。それを武器に、「前例」に頼らずに進まなければならない北海道での販売拡大に、果敢に挑む声がけ役になれればと思っています。

PROFILE

まつだ・こうすけ

1984年生まれ、千葉県出身。大学卒業後、空調機器メーカーのダイキン工業（株）に入社。営業職を7年間務めた後、2014年7月に青年海外協力隊員としてタンザニアに赴任（現職参加）。16年6月に帰国し、復職。18年10月、ダイキン工業が全額出資する地域販売会社のダイキンHVACソリューション北海道（株）に主任として出向し、現在に至る。

協力隊活動

マサシ県庁（ムトワラ州）の地方出先機関であるルクレディ郡事務所に配属され、ヒラタケ栽培や養鶏による住民の収入向上の支援に取り組んだ。左写真は、ヒラタケの菌床（人工の培地）をつくる女性グループ。右写真は、出荷できる状態になったヒラタケ。種菌を植え付けた菌床をビニール袋に詰め、湿度が高くて暗い部屋の中で育てる。

COMPANY PROFILE

ダイキンHVACソリューション北海道株式会社

設　　立：1985年
従業員数：38人（2020年8月現在）
本社所在地：北海道札幌市
事業内容：空調機器等の販売・設備工事など

ダイキン HVAC ソリューション
北海道株式会社
取締役社長
Nakamura Akinari
中村明成 さん

VOICE from the COMPANY JICA海外協力隊経験をこう見る

「話を聞く力」が仕事のベースに

「営業」の仕事は、商品の良さを流暢に語れる人が向いているように見えるかもしれませんが、実際は「話を聞く力」のほうが重要です。相手の言葉に耳を傾け、相手が言葉にしきれないニーズまで見極めたうえで、それに合った商品やサービスを提案する。そうすることで初めて相手の信頼を得ることができるからです。松田の営業成績が優れているのは、「話を聞く力」があることの証ですが、それが鍛えられたのは、協力隊の経験を通じてではないでしょうか。文化や考え方が日本人と異なる方々と共に働くためには、相手を理解することが何より重要になるはずだからです。

松田は「主任」としての仕事でも、「話を聞く力」を発揮して若手社員との信頼関係を築き、積極的に彼らの面倒を見てくれています。いずれ管理職を務めるようになったときにも、やはり「話を聞く力」を武器に活躍してくれるだろうと期待しています。

case 4

Business

株式会社TOKYO 社員

永田 彰さん

（ラオス・コンピュータ技術・2015年度1次隊）

JICAの技術協力プロジェクトの専門家として、現地のスタッフと打ち合わせをする永田さん（右端）

協力隊時代のカウンターパートに学んだ「挑戦する姿勢」

国内外でITに関する事業を行う（株）TOKYOに籍を置きながら協力隊に現職参加した永田さん。協力隊時代のカウンターパートの働き方を見て学んだ「果敢に挑戦する姿勢」を、復職後、自身の仕事の基本姿勢とするようになった。

―株式会社TOKYOの概要についてお教えください。

主に情報処理システムの開発やコンサルティングを行う会社で、社員6人はみなシステムエンジニアです。国内の企業にサービスを提供するだけでなく、JICAの技術協力プロジェクトに社員が専門家として参加するなど、海外を対象とした事業も行っています。私は当社に籍を置いて協力隊に現職参加しましたが、社長を含むほかの5人の社員はいずれも当社で働き始める前に協力隊に参加しています。そのため、ITの技術を使って途上国のためになる仕事をしよう、そのためにも国内の仕事もしっかりと取り組み、そこで技術力を高めていこうという意識が、社内で共有されています。

―永田さんが協力隊の任期を終えた後に携わっているのはどのような業務でしょうか。

帰国直後は、国内の企業を相手にした情報処理システムの開発が主な担当業務でした。具体的には、導入するシステムに期待する役割をお客様へのヒアリングで明確にすること、その情報をもとにシステムのプログラムをつくることなどを担当しています。昨年の3月からは、ラオスで始まったJICAの技術協力プロジェクトでの仕事に従事しています。ベトナム戦争によりいまだに残る不発弾を除去する政府機関の能力強化を目標とするプロジェクトで、私はIT等の専門家として加わっています。

―協力隊に参加した後、それ以前にも携わっていた国内の企業のシステム開発を担当されたとのことですが、協力隊の経験によって仕事のやり方に変化などはあったのでしょうか。

国内の企業を相手にする場合、当初提出した計画や納期を後に変更すること、あるいは不具合が起きることを許容していただくことなどは難しい。そのため、お客様にとってより良いと思われるけれども、開発が滞ったり不具合が起きたりする可能性がある新しい技術を、リスクを覚悟で試すことはどうしても躊躇してしまいがちです。私も協力隊に参加する前は、「とにかく安全なことにしか手を出さない」というスタンスで仕事をしていました。それが、協力隊を経験したことによって、お客様にとってより良いと思われ、うまくいかなくてもある程度のところで収拾を付けられる見込みならば、果敢に提案してみるようになりました。例えば、システムのプログラミングは通常、「フレームワーク」という既製の部品を使うのですが、リスクが解明し尽くされていない新しいフレームワークについて、うまくいけばお客様にとってメリットが大きいものだったことから、「試しに使い、様子を見て外すかどうかを決めませんか」と提案したことがあります。すると、お客様には予想以上に意図を理解していただくことができました。

そうした「果敢に挑戦する」という姿勢は、協力隊時代にカウンターパートだった同僚教員に学んだものです。例えば彼は、自力で知識を集め、インターネット経由でアンケートの回収などができるサービスを使って学生のテストを行うことを試みたことがありました。結局、配属先の大学のネット環境の不具合でテストは中断せざるを得なかったのですが、彼はそれで落ち込むことなく、次の手を考え始めた。そういうたくましさは、「人間として学びたい」と心底思えるものでした。

―現在、JICA専門家として国際協力に携われているなかでは、協力隊経験がどのように糧になっていると感じていますか。

協力隊時代に私のカウンターパートは、生活のために副業をしなければならないにもかかわらず、国際協力事業の受け入れでさまざまな仕事が降ってくるため、時間のやりくりが難しいといった悩みを打ち明けてくれました。また、彼らと共に活動するなかで、現地の方々のパソコンスキルのレベルなども把握することができました。そうした経験により、現地の人たちがどのような状況に置かれているのかを具体的に想像し、彼らの心に寄り添いながら国際協力事業に取り組むことができていると感じています。そうした姿勢があって初めて、本当に現地の方々のためになる方向にプロジェクトを持っていけるのではないかと思います。

―今後の抱負をお聞かせください。

当社は、社員がそれぞれ自分で仕事を見つけ、それを自ら担当するという、言わば「個人事業主」のような形で働くことが基本となっているのが特徴です。私が携わっているラオスの案件も、自分でポストの公募を見つけ、当社に籍を置きながらの従事を社長に認めてもらったものです。そうしたなか、先ほどお話しした「果敢に挑戦する」という協力隊での学びは、私にとってとても大きな財産なので、今後、できれば日本の子どもたちにそれを伝えるようなプロジェクトを社内で提案し、実現したいと思っています。

COMPANY PROFILE

株式会社TOKYO

設　　立：2007年
従業員数：6人（2020年8月現在）
本社所在地：東京都中央区
事業内容：情報処理システムの開発やコンサルティング、技術協力（海外）など

PROFILE

ながた・あきら

1979年生まれ、広島県出身。大学院修了後、システム開発会社にシステムエンジニア（SE）として6年間勤務。2013年、SEとして（株）TOKYOに入社。15年6月に青年海外協力隊員としてラオスに赴任（現職参加）。17年6月に帰国し、復職。現在は、IT等の専門家としてJICAの技術協力プロジェクト「貧困削減に資するUXO Laoの実施能力強化プロジェクト」に参画中。

協力隊活動

首都ビエンチャン市にあるラオス国立大学の工学部IT学科に配属され、プログラミングの授業などを担当。写真は、同僚教員と共に開催した「アイデアソン」に参加した配属先の学生たち。アイデアソンは、グループによるディスカッションでアイデアの創出や改善の質を競うイベントで、永田さんたちは「位置情報アプリの活用方法」をテーマにしたものを開催した。

株式会社 TOKYO
取締役社長

Sakurai Hitohiro
桜井人広さん

VOICE from the COMPANY　JICA海外協力隊経験をこう見る

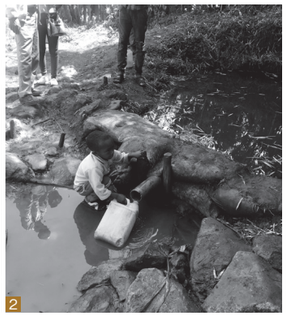
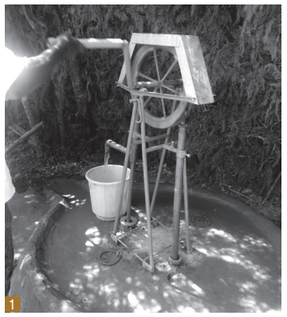
「積極性」の向上が顕著

永田は協力隊経験によって「積極性」が増したと感じています。例えば、最新のIT技術などに関する情報を仕入れては、社内で発信してくれることが多くなりました。さらに、インターネット上で日々リリースされる新たなサービスについても、有効な活用方法を模索したり、活用に挑戦したりする傾向が強まっています。

弊社は、お客様のニーズを聞いてそれに合うサービスを提供するだけでなく、ITの技術を活用して社会の問題を解決していきたいと考えています。社会の問題を解決するためには、ITの専門性だけあっても足りず、「農業」や「教育」などほかの専門性と組み合わさることが必要です。その点、永田はJICA専門家として「国際協力」に関する専門性を深めている最中ですので、それとITの専門性とを組み合わせながら、まだ解決されていない世界の諸問題をITの力で解決していってくれることだろうと期待しています。

活動環境

配属先の基礎情報	名称	アレタウォンド郡 水・鉱物・エネルギー事務所 （南部諸民族州水資源局の地方出先機関）
	所在地	南部諸民族州シダマ県
	管轄地域	アレタウォンド郡（人口約20万人）
	職員数	約20人（所属した水部門は7人で、うち2人が給水ポンプの技術者）
	所属した水部門の所管事業	灌漑用水や村落部の給水に関する事業
「安全な水へのアクセス」の状況	エチオピアにおける給水事業	エチオピア政府は、村落部の安全な水へのアクセスの改善を目的に、住民が自己負担で給水施設を設置・維持管理する「セルフサプライ」の拡大を進めており、南部諸民族州では水資源局がその所管部局となっていた。
	ロープポンプとは？	ロープ、ピストン、ハンドルなどでつくる簡素で安価な浅井戸用の揚水装置。エチオピアでは、「セルフサプライ」の1つの方策としてその普及が進められていた。井戸の上部を塞ぐため、釣瓶で水を汲み上げる浅井戸と異なり、異物による井戸水の汚染を防ぐことができる。

1 エチオピアで普及が進められているタイプのロープポンプ
2 アレタウォンド郡では、衛生面での保護をされていない湧水を飲料水に使っている世帯がまだ多かった
2 同郡では、写真のような悪路を行かなければ水場に辿り着けないエリアも多い

私の引継書
～未来の協力隊員へ～

協力隊経験者たちに、「未来の協力隊員たち」に向けた活動報告を行っていただきます。

話＝原（はら） さつきさん
（エチオピア・コミュニティ開発・2017年度3次隊）

PROFILE

1991年生まれ、埼玉県出身。埼玉大学教養学部卒。インターネット広告の営業に4年間携わった後、2018年1月に青年海外協力隊員としてエチオピアに赴任。20年1月に帰国。

活動内容

私に求められていた活動は、配属先の所管事業となっていた「ロープポンプの普及と維持管理支援」などをフォローすることでした。ロープポンプに関して配属先が担うことになっていたのは、具体的には主に次のような役目です。

❶ロープポンプの新設を促すプロモーションを行う。
❷設置を望む住民がいたら、民間の製造業者を手配する。普及促進のための特別措置として、配属先が部品の無償提供や、製造業者に払う料金の補助を行う。
❸修理を望む住民がいたら、配属先の技術者が赴いて修理をする。ここでも普及促進のための特別措置として、必要な部品は配属先の提供、作業代は無料となっていた。

私の着任当時、❶～❸のいずれもが活発には行われていませんでした。しかも、そもそも管轄地域にどれくらいロープポンプのニーズがあるのかについて、配属先にはまとまったデータがありませんでした。そこで私は、管轄地域の村々を回り、次のような質問で給水状況の聞き取り調査を行いました。対象としたのは、約100人の住民です。

■「飲料水」をどのようなタイプの水場（湧水、井戸、水道など）から得ているか。
■水汲みの頻度、量、料金（水場の使用が有料の場合）。
■ポンプが付いていない浅井戸が家にあるか。
■いくらならロープポンプを買うか。

この調査により、井戸や水道の水より安全性が低い湧水を飲料水に使っていると答えた人が5割に上るなど、郡内にロープポンプを普及させる必要性が確認できたほか、安全な水へのアクセスが特に悪く、ロープポンプを普及させる必要性が高いエリアがどこなのかも判明しました。そうした調査結果を配属先に示し、その了承を得ながらエリアを絞ったプロモーションに力を入れたところ、任期中に30台のロープポンプを新設することが叶いました。

ロープポンプを新設した住民にその後、話を聞くと、「多少時間がかかっても、飲料水はやはり水道まで汲みに行っている」という人も多く、安全性についての理解を広めることが、ロープポンプ普及の課題なのだと感じました。

1 ロープポンプを設置するために、既存の浅井戸にコンクリートの覆いをつくる様子
2 ロープポンプを設置した住民にロープポンプの使い方を説明する原さん（左端）

未来の協力隊員へ

私の経験から協力隊員にとっての教訓だと感じていることの1つは、活動でかかわる人の自尊心を傷つけるような衝突は、できる限り避けたほうが良いということです。私は、ロープポンプのメンテナンスを担当していた配属先の技術者とそのような衝突をしてしまい、以後、共に活動することが難しくなるという経験をしました。彼は配属先にストックしてあるロープポンプの部品を管理する立場にあったのですが、おそらく管理がずさんなのだろうと見た私は、在庫を確認させてほしいと依頼しました。かたくなに断るため、何か不正があるのだろうと思ってきつい言い方で責め寄ったところ、関係が悪化。その後、修復を試みたものの、共にメンテナンスに赴くことなどは難しくなってしまいました。

協力隊員にとっての教訓だと感じているもう1つのことは、「広い視野で協力者を探すことが重要」ということです。私は配属先の技術者との協働が難しくなったとき、一時は途方に暮れたのですが、やがて、配属先外の人や、ロープポンプにはかかわりのない配属先の同僚のなかに助っ人を見つけることができました。例えば、私の着任後に新卒で配属先にやってきた女性がその1人です。「私はまだ仕事がないから、一緒に何かやらせてほしい」と言う彼女に、給水状況に関する聞き取り調査や、学校を回って行った水衛生に関する啓発活動などに協力してもらうことができました。

良いと思って始めた活動が、現地職員の仕事を奪ってしまった

文＝玉田健一（たまだ けんいち）さん（タイ・青少年活動・2017年度2次隊）

赴任から半年が経った頃、配属先の料理担当職員であるNさんと衝突してしまった。きっかけは、Nさんの仕事である入所者の食事準備を、ほとんど私が担当するようになったことだ。私が料理をするようになると、興味本意からか、入所者も手伝ってくれるようになり、お互いの国の料理をつくって一緒に食べるなど、入所者との信頼関係も深まっていった。当初はNさんも、「ケン（私の呼称）が来てから楽になった」と上機嫌だった。

しかし、次第に入所者はNさんの料理を食べなくなっていった。私は他の活動もあり、毎日は食事準備ができなかった。そんな中、センター長が入所者に、「なぜNがつくった食事を食べないのか」と尋ねたところ、返答は「あいつの飯はまずい！」の一言。実際には食事以外の不満もあっての返答だったのだろうが、普段入所者と接する機会がないセンター長は、Nさんに問題があると判断し、Nさんにきつく当たるようになった。上下関係が非常に厳しいタイ社会において、この圧力はNさんを精神的に追い込むことになった。

そして、ある日Nさんから唐突に「ケンはもう料理にはかかわらないで」と言われた。私はすんなり受け入れることができず、「かかわらないことは約束するが、入所者の健康のことを考えて料理をしてほしい」と言ったところ、Nさんも反発し、収拾がつかない状態になった。そこへ、仲介に入ってくれたカウンターパート（以下、CP）がこう言った。

「ケンの考えや活動はすごく良い。でも、それによって職員が困るなら、それはボランティアにはならないんじゃないか」

その通りだった。もともと私が入所者の料理をつくるようになったのは、栄養面も味も考えていないNさんの料理が私にはあまりにも投げやりに見え、入所者のために改善しなければと思ったからである。しかし、当初うまくいったかに思えた活動が、結果としてNさんの仕事を奪ってしまったのだ。

CPのこの言葉によって、私は素直に謝ることができ、その後の方針については、Nさんが食材を準備して、料理は入所者がつくり、私が料理の助言をするということに落ち着いた。たとえ歓迎されても、自分がやった方がうまくできても、現地の人の仕事を奪ってはいけない。私はこのとき、それを身をもって学んだ。C

任期終盤に配属先で人身取引被害者支援対策の分科会を行い、その中のイベントの1つとして入所者対象の腕相撲大会を開催。レフェリーをしているのが玉田さん

PROFILE

1989年生まれ、兵庫県出身。大学卒業後、警察官として勤務する中で、家庭環境に恵まれないがゆえに、非行に染まる少年の境遇に胸を打たれる。約3年間勤務したのちに退職し、フィリピンへの語学留学などを経て、2017年9月、青年海外協力隊員としてタイに赴任。19年9月に帰国し、現在は、JICA二本松訓練所に勤務。

活動概要

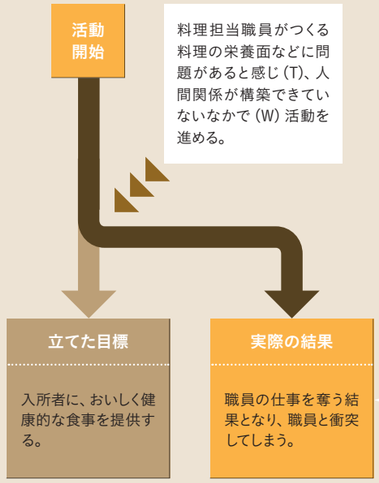
男性人身取引被害者のシェルターに配属され、主に以下の活動を行う。

●被害者のストレス緩和を目的とし、ボクシング、アートセラピー、料理、魚釣りなど、特技を生かした幅広いアクティビティ

●被害者の出所後の就職支援を目的とした英会話指導　など

“失敗”から学ぶ #184

事例整理



【本事例の状況（SWOT分析）】

	促進要因	阻害要因
内部	【隊員の強み（S）】CPとは信頼関係が構築できている。料理が得意。	【隊員の弱み（W）】活動初期で言語があまりできず、料理担当職員と信頼関係が構築できていない。
外部	【環境の良い面（O）】入所者はよりよい食事をつくることに積極的。	【環境の悪い面（T）】料理担当職員は仕事への熱意があまりない。

隊員自身の振り返り

全ては人間関係だと思います。Nさんとは、まだ人間関係を構築できていない時期に活動を始めたので、その後はNさんが主導の活動となるよう、積極的にコミュニケーションをとるべきでした。逆にCPとは、この時点ですでにお互い踏み込んで話せるくらいの人間関係ができていたと思います。赴任当日から毎晩の食事の誘いは体力的にきつかったですが、まずは人間関係からと考え、断りませんでした。共有した時間の長さというのは、かけがえのないものだと思います。その信頼関係があったからこそ、彼は私にはっきりと意見を言うことができ、私もそれを受け入れることができました。CPはその後も、良き友人として、良き兄貴分として、良きアドバイザーとして2年間、私を支えてくれました。

他隊員の分析

自分は2年でいなくなる存在

現地の職員を見て「私の方がうまくできる」「私の方が子どもたちと関係を築けている」と思ってしまうことは、誰にでもあるのではないでしょうか。私にも失敗があります。私はそんなとき、「自分は2年でいなくなる存在だ」と自分に言い聞かせるようにしました。将来子どもが困ったときに頼りにするのは、海外にいる自分ではなく、現地の職員や地域の人です。大切なのは何をするかではなく何を残せるか、そう考えると隊員は黒子として現地職員と子どもが良い関係性を築くためのサポートに徹するのもひとつの活動方法かもしれません。

文＝協力隊経験者

- 中南米・青少年活動・2016年度派遣
- 取り組んだ活動

被虐待や非行などの経験を持つ10代少女のための自立支援施設にて、学習や課外活動の支援を行った。

関係づくりに時間をかけることも活動のひとつ

限られた期間の活動では勇み足になり、かえって配属先に混乱や衝突を生んでしまうことは良くあることだと思います。私も似たような経験がありました。2年間を振り返ってみると、ゆっくりと関係づくりに時間をかけるのも大切な活動のひとつだと感じました。そのため、何か新しい行動を起こす前には現場の状況をよく観察・分析し、自分がやるべきことを焦らずじっくり考え、その間に積極的に同僚との関係づくりの時間を取っていれば、衝突を生む可能性は低くなるのではないかと思います。

文＝協力隊経験者

- アジア・青少年活動・2016年度派遣
- 取り組んだ活動

子ども文化センターにて青少年向けの活動の提供として日本語や日本文化紹介のクラス、英語クラス、対外活動のコーディネーションなどを行った。また、施設運営の改善補助なども担当した。

派遣人数は少ないものの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

希少職種図鑑

#G128

フェンシング

派遣中 ▶ 0人
累　計 ▶ 1人
分　類 ▶ 人的資源
活動例 ▶ フェンシングの普及や競技力の向上のための技術指導など
類似職種 ▶ ー

※人数は、2020年7月31日現在。

子どもたちに技術指導をする宮田さん。練習時間に体育館に行っても選手が現れないということが日常茶飯事だったので、選手に目標を持って練習に取り組んでもらうための方法を考えたり、選手と良い関係を築けるかを考えたりして活動を進めていった

PROFILE

岐阜県出身。13歳からフェンシングを始める。中央大学経済学部を卒業後、スポーツ用品店に勤務、2018年3月、青年海外協力隊員としてコスタリカに赴任。20年3月、帰国。現在は東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会のフェンシングチームにて勤務をしている。

活動概要

フェンシング（フルーレ）※の技術指導や普及活動のため、主に以下の活動を行う。

- ●9～17歳の子どもたちに対するフェンシング（フルーレ）の技術指導
- ●地方の小学校でのスポーツの普及活動
- ●病院やリハビリセンターでの車いすフェンシングの指導・普及活動

話
宮田結以（みやたゆい）さん
（コスタリカ・2017年度4次隊）

Q メインの活動は？

主に技術指導に力を入れました。技術向上に関しては週2回しかなかった練習を週4回に増やし、1対1の技術指導の機会を多く設け実戦により近い練習を実施。私の任期終了後も引き続き練習を続けられるよう、選手自身が考えて練習メニューをつくり、選手だけで練習できるような取り組みも行いました。選手たちの指導を始めて半年後、国内でのランキングを決める試合で、指導をしていた選手がランキング4位以内に入り、国際大会出場の切符を手にしました。2年目も技術指導を淡々と続け、その成果が2018年8月の中米大会*に現れ、男子フルーレ12歳以下の部で3位入賞、女子フルーレジュニアの部で3位入賞、女子フルーレ団体で2位に入賞することができました。

Q 活動の最大の困難は？

赴任当初、配属先が私に求める活動はこれと言ってなく、またコスタリカにいる選手やコーチなど情報が何もない状態でした。そのため自分自身で選手を探し協力者を見つけるところから、私の活動は始まりました。当初はゴールが見えない状態でひたすらできることを探しては挑戦する毎日でした。また、どのようにすれば選手と良い信頼関係を築けるかということを思案することも多かったです。

Q どう乗り越えましたか？

できるだけ現地の人たちの考え方を尊重し、彼らのルールを理解し、その中で改善できる部分を見つけ、練習に反映させていきました。例えば現地の子どもは相手が先生であろうがひるまず反論し、疑問があればすぐに質問します。それに対して叱るのではなく、共に考え解決策を見つけることが重要であり、こういった行動の積み重ねで信頼関係が構築されました。また、フェンシング連盟の会長とは密に連絡を取り、話し合う機会をつくることで会長の求めるものを理解し、自分にできることを探していきました。

Q 派遣予定の同職種の隊員にメッセージをお願いします。

フェンシングは道具がそろっていないとなかなか試合ができず、また細かな技術指導がしづらいスポーツです。湿度の高い国ではすぐに道具が錆びて使えなくなってしまうことも多く、道具が容易に手に入らない国では、道具を大切に扱うことや正しいメンテナンス方法などを教えることも大切です。どんなスポーツでも基本的に子どもたちに伝えることは他のスポーツとは大きく変わらないと思います。現地の人とコミュニケーションを取って、相手の文化を尊重しながらご自身の知識を熱い想いで伝えてあげてください。その想いは必ず届きます！ C

※ フェンシングには「フルーレ」「エペ」「サーブル」と3種目あり、種目によって攻撃が有効になる箇所が異なる。フルーレの場合は、胴体のみが有効面。攻撃は突きのみ。
* 中米大会…パナマ・ニカラグア・グアテマラ・エルサルバドルなど中米各国が参加する大会。

#H135

学校保健

派遣中 ▶ 4人
累　計 ▶ 26人
分　類 ▶ 保健・医療
活動例 ▶ 学校保健の理解促進のため学校における保健教育の実施 など
類似職種 ▶ 看護師、保健師、公衆衛生 など

※人数は、2020年7月31日現在。

巡回先の学校で児童の身長を測る桒山さん。2年間の活動で、「身体測定の大切さ」を理解してくれた教員はたくさんいたが、毎年実施するという「継続性の大切さ」を理解してもらうにはもっと時間が必要だと感じた

PROFILE

1988年生まれ、神奈川県出身。2012年、日本体育大学体育学部健康学科を卒業。その後、上海日本人学校中学部で2年間保健体育教諭、バンコク日本人学校で3年間養護教諭として勤務。17年6月、協力隊員としてガーナに赴任、19年6月帰国。現在は、東京都立高等学校にて非常勤講師として勤務しながら、日本語教師の資格を取得するために、日本語教師養成講座420時間を受講している。

活動概要

学校保健の普及を目指し、配属先の教育事務所管轄内にある学校を巡回しながら、以下の活動を行う。

- ●モデル保健室の機能・環境の整備、運営
- ●児童生徒の健康についての調査・分析
- ●児童生徒への保健指導・応急処置の実施
- ●学校保健担当教諭を対象とした、ワークショップの実施

話
桒山瑠美（くわやまるみ）さん
（ガーナ・2017年度1次隊）

Q メインの活動は？

ガーナでは、日本で毎年一度行われている児童生徒の健康診断が行われていないため（高校を除く）、児童生徒の健康状態を把握することができません。そこで、カウンターパート（以下、CP）と配属先の管轄内にあるベーシックスクール5校を巡回しながら身体測定を行い、その結果をもとに児童生徒や学校保健担当教諭に保健指導を行いました。1校あたり約700人の児童生徒が在籍しているため、約3カ月をかけて身体測定を実施。その後、測定結果を分析し、約2カ月をかけて実施校で測定結果の返却や保健指導を行いました。2年目はCPが変わり、私の帰国後の継続性を考え、巡回先の学校保健担当教諭に測定方法を説明しながら実施。2年目になると、1年目に配布した測定結果の用紙を大切そうに持っている生徒や、1年目と2年目の測定結果を見比べている生徒もいました。また、保護者に身体測定の結果を報告したり、生活習慣について保健指導したりしている学校もありました。

Q 活動の最大の困難は？

赴任当初、巡回先で「なぜ、身体測定を行うのか」と言われ、実施の意義・目的を校長や担当教諭に理解してもらえませんでした。その理解を得るまでに時間がかかりました。

Q どう解決しましたか？

各校の校長に、身体測定とその後の保健指導により、児童生徒の発育発達の状態や病気の早期発見、健康増進につながるということを、資料を用いて説明しました。理解を得られたことで校長から教諭へと実施の伝達がうまくいき、活動をスムーズに行うことができました。なかには疑問をもつ教諭もいたので、そのときはその疑問が解決するまで話し合ってから活動を行いました。身体測定後、児童生徒に測定結果を返却しただけでなく、校長と学校保健担当教諭に分析結果を説明したことによって、活動に対してさらに興味をもってもらうことができました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

保健室経営*2や保健指導など今までの学校保健に関する経験を存分に生かすことができる職種だと思います。しかし、日本と同様の活動は難しいので、今までの経験を軸に派遣国に合わせ活動してみてください。そのためには、早くメインの活動を始めたいという気持ちを少し抑え、はじめの1、2カ月は配属先の学校や児童・生徒の様子を観察するのもいいと思います。うまくいかないことの方が多いかと思いますが、現地の人とたくさんコミュニケーションをとって、よりよい活動にしていってください。応援しています。 C

*1 ベーシックスクール…幼稚園、小学校、中学校。
*2 保健室経営…各学校で設定される教育や保健の目標を具体的に実現するため、子どもの健康状態や求めるものを把握し、彼らの健康課題を解決できるように保健室の機能を発揮すること。

JICA Volunteers'
before ▸ after 人生を変えた2年間

before
建設コンサルタント会社の
農業土木設計技師

↓

after
クラフトビール醸造者

終わりなきモノづくり

モザンビーク・農業土木・2014年度4次隊
森本（もりもと） 宝（たから）さん

左上・右：ビールをつくる現在の森本さん
左下：森本さんが初めてつくったビール「黒宝（こくほう）／Obsidian」。バナナやキャラメルの香りがするコクのある黒ビール。商品名は自身の黒ビールへの愛と、名に恥じないものをつくりたいという思いから自分の名前も入れた。醸造回数とレシピ改良を重ね、定番商品のひとつになりつつある。英語名のObsidianは黒曜石という宝石

森本さんが初めて行った海外は派遣国のモザンビークだった。異文化に触れたことでもっと世界を見たいと、帰国後に中央ヨーロッパを旅行。チェコで出会ったおいしいビールの記憶がその後につながり、現在は京都でビール醸造者として働いている。

日本と異なる環境で技術を生かす

「地元の愛媛を出ることは考えていなかった」という森本さんは、建築関係の仕事をしていた父親の影響と、生活の基本である食にかかわる農業の役に立ちたいと、地元の高校・大学・大学院で農業土木を学んだ。農業土木とは、農地や水路、ため池などの灌漑（かんがい）施設の設置計画など農業系のインフラをつくる分野・事業を指す。大学院修了後は、建設コンサルタント会社で農業土木事業に携わり、ため池の改修設計などを担当していた。右肩上がりの業界ではなく、過疎化・高齢化による農業従事者の減少により、農業より防災の要素が強い。防災の重要性は理解していたが、農業に貢献し、新しい物をつくりたいという気持ちが日に日に増していった。

「高校生の頃、先生が協力隊のことを話していていつか行きたいと思ったことを、働いて3年経ったときにふと思い出したんです」

国が変われば農業土木の環境もガラリと変わることや、食やその生産に困っている人の役にも立つことができると思い、応募。合格し、モザンビークへの派遣が決まった。

活動地域は農業で生計を立てる人が多く、雨期の水を乾期に利用できれば、年間を通して多様な農産物の生産が期待されていた。しかし、灌漑技師の不足や技術的な問題から、農業用ため池の多くは決壊。森本さんは最初の1年で各地のため池を調査・改修するなかで、ため池の設計や施工に不備があることがわかった。そこでため池づくりの参考となる「モデルため池」をつくる計画を立てたところ、運よく大きな予算が割り当てられ、大事業が開始。森本さんは、毎日現場に行き、測量・調査・設計・経理・工事発注・施工管理、また行政とのやりとりなどを行った。

現地での一番の苦労は人の説得だ。特にため池の構造で揉めたという。ため池は容量より多くの水が入っても決壊しないように水を逃す道が必要だが、その説明に苦労した。

「水を逃す道の幅を広くしても、高さが同じなら溜まる水量は同じです。現地の人は水を貯めたいという気持ちから、幅を狭くしたがる。狭いと流れ出る水量が少なく、水が堤防の高さを超えて壊れる原因になるのですが、それを理解してもらうのに苦労しました」

モザンビークで協力隊員として活動する森本さん。モデルため池が完成したときに記念として撮影した

言葉が拙くてもしっかり伝えないと人命にかかわる大事なことだ。論理的に話す力や、NOと言う精神力もこのとき身について た。「重圧とやりがい、両方を感じて無我夢中で活動した」と振り返る。現地の人の説得もうまくいき、1年がかりでモデルため池は完成。任期を満了し、森本さんは帰国した。

納得できる1杯を求めて

「やりきったという気持ちが大きくて、農業土木からは一旦離れようと思った」という森本さん。モザンビークが初海外だった森本さんは、広く世界を見ようと旅に出る。海外で現地の生活に触れ、人とかかわるなかで知的好奇心が満たされる喜びを感じたことに加え、日本を外国人に説明するために改めて日本を知る経験も、森本さんにとって刺激的だった。今後も外国人とかかわる仕事がしたいと、旅行後は外国人対応ができる旅館に勤務。その後、外国人観光客が一番多い京都に職を求め、そのときに「京都ビアラボ」のオープンを知った。京都ビアラボはクラフトビールを製造・販売し、そこで飲食も可能な店。もともとビールが好きだった森本さんは、旅行先のチェコでビール工場に行った記憶も蘇り、同店で働くことを決意した。

バースタッフとして勤務しながら、ビール醸造の研修を約半年受け、現在は主に醸造を担当。ビアラボのお客さんは7割が外国人、醸造責任者もオーストラリア人のため、協力隊経験で得た「伝える力」は今も役立っているという。「責任者が遠回しな言い方を好まないというのもありますが、私も伝えたいことはズバっと言います」と森本さん。以前、責任者が製造した瓶ビールの味が変わってしまったことがあった。品質保持のためにはマズイと言う必要があり、そのとき迷わず言った。今はその原因究明にも取り組んでいる。

醸造に携わって1年。おいしいビールはつくれるようになったが、本当においしいビールとはどんなものかと考えるようになった。

「クラフトビールは消費者の需要をもとにつくるというより、自分が飲みたいと思うビールをつくるという要素が強いので、日々研究です。それが私たちのカラーにもなります」

トライアルアンドエラーの毎日で悩むことも多い。その一方で、毎日発見がある。自分が納得するビールをつくるため、森本さんの探求は始まったばかりだ。 C

森本さんのプロフィール

Kyoto Beer Lab
京都ビアラボ

オープン：2018年3月
住　　所：京都市下京区十禅師町201-3
業務内容：クラフトビールの製造・販売（バー営業）
URL：https://kyotobeerlab.stores.jp/

京都ビアラボの外観

2018	2017	2015	2011	1986
after		JICA Volunteer	before	

愛媛県出身。

愛媛大学大学院修了後、建設コンサルタント会社にて農業土木の設計技師として勤務。

3月、青年海外協力隊に参加。

モザンビーク北部にあるナンプラ州の農業局に配属され、灌漑施設の整備に取り組む。

4月、帰国。

NPO法人えひめグローバルネットワークでモザンビーク案件を担当。

旅行でチェコのビールに感動。

京都茶ビール合同会社に入社。

ブリューパブ京都ビアラボでバースタッフとして働きながら、ビール醸造の研修を受け、現在はビール醸造を担当。

開発途上国には農作物を栽培することに困っている人が日本より多くいることを感じ、農業土木の技術が役に立つのではないかと思い、協力隊への参加を決意した。

チェコは国民1人当たりのビール消費量が世界一で、ピルスナービールの発祥の地でもある。同国でビールのおいしさに感動したことが、ビール製造の道に進むひとつのきっかけになった。

帰国後

よもやま話

第19回 障害児・者支援隊員篇

「日本社会への復帰」や「進路開拓」、「協力隊経験の生かし方」など、協力隊員の「帰国後」について、OB・OGに語り合ってもらいます。

［座談会参加者］

A さん（女性）

【派遣前】
特別支援教育支援員
【協力隊】
▶退職参加
▶・障害児・者支援
・中南米
・2016 年度派遣
▶障害児・者の支援施設で教育プログラムの充実化に従事。
【現在】
民間企業勤務

B さん（女性）

【派遣前】
特別支援学校の教諭
【協力隊】
▶現職参加
▶・障害児・者支援
・アジア
・2016 年度派遣
▶障害児・者の支援施設で教育プログラムの充実化に従事。
【現在】
復職

C さん（女性）

【派遣前】
特別支援学校の教諭
【協力隊】
▶現職参加
▶・障害児・者支援
・アフリカ
・2016 年度派遣
▶特別支援学校で職業訓練プログラムの充実化に従事。
【現在】
復職

A 発達障害の子どもを積極的に受け入れている中高一貫校の教員や、地方自治体の特別支援教育支援員として働いた後、退職して協力隊に参加しました。協力隊では障害児・者の支援を行うNGOに配属され、教育プログラムの改善やスポンサー獲得の支援などに取り組みました。帰国後に就職したのは、教育用のデジタルコンテンツの開発などを行う会社で、現在は算数教材の開発に携わっています。

B 派遣前は、知的障害がある子どもが通う特別支援学校の小学部で学級担任をしていました。協力隊は現職参加で、主に自閉症や知的障害の子どもが利用する施設に配属され、教育の質を上げるための支援などに取り組みました。帰国後に復職したのは派遣前と同じ学校です。復職時から現在まで、自立活動専任を務めています。

C 私も派遣前の勤務先は知的障害がある子どもが通う特別支援学校で、小学部と高等部の学級担任をしていました。協力隊では、知的障害の子どもが通う特別支援学校に配属され、職業訓練クラスの支援などに携わりました。現職参加だったのですが、帰国後に配属されたのは派遣前に勤めていたのとは別の特別支援学校で、肢体不自由と知的障害の子どもが通う学校です。1年間は小学部の学級担任を務め、その後、特別支援教育コーディネーターの専従となって現在に至ります。

A 私は派遣前に教員として働いていたときから、「教員に向いていない」と感じていました。「学校」という限定された場だけの人間関係に縛られることを、どうしても窮屈に感じてしまっていたからです。そうして、帰国後は教員に戻るまいと決めて協力隊に参加したのですが、そこで「ソーシャルワーク」の仕事の楽しさを知りました。配属先と行政や企業をつなぎ、それらから継続的な支援を取り付ける一種のソーシャルワークに力を入れたのですが、初対面の人のところに飛び込んでいくことが苦にならないので、人や組織をつなぐそうした仕事が楽しく、自分に向いていると感じました。そうして帰国後、学校で悩みを抱える子どもを支援する「スクール・ソーシャルワーカー」を目指そうと考えるようになり、ソーシャルワークの国家資格である社会福祉士の資格を取るために通信制の大学に入学しました。現在も、仕事のかたわらで勉強を続けています。今の勤務先は「大学で勉強しながら働けそうか」という基準で選んだのですが、教材を開発する際に「発達障害の子も使用できるか」といった視点を持ち込むことができるなど、私のこれまでの経験を生かせる楽しい仕事です。そのため、しばらくはソーシャルワーカーになるための勉強と仕事の両立を続けたいと思っています。

協力隊経験での学び

A 帰国してから今の勤務先で働き始めるまでに半年ほど経っていたこともあり、私は「逆カルチャーショック」のようなものをさほど感じませんでした。現職参加されたお2人は、帰国してすぐに働き始めたことと思いますが、スムーズに復職できたのでしょうか。

B スムーズではありませんでした。派遣前と同じ学校に復職したので、同年代の同僚が2年前より重要な役割を担っていたり、職場での人間関係をより深めていたりしていたため、何よりもまず「疎外感」が強かったです。

C 私は派遣前と異なる学校に復職したので、初対面の同僚たちと働くことになったわけですが、「協力隊員としてアフリカに行っていました」と自己紹介すると、「太鼓を叩いてみてよ」などと言われ、彼らとの感覚の違いに当初は気疲れしていました。復職後に特に悩んだのは、協力隊の経験をどのように仕事のなかで生かすかについてです。その方法が見えず、校長にも相談をしたのですが、「協力隊時代、配属先の周辺の特別支援学校も巡回して、お手伝いできることを探した」といった話を伝えたところ、協力隊経験が生かせる職かもしれないということで、特別支援教育コーディネーターに任命してもらうことができたのでした。

B 私が自立活動専任に任命されたのも、協力隊で行った活動などを加味してのことだったようでした。

C 特別支援教育コーディネーターは実際、協力隊経験を生かしやすい立場だと感じています。地域の学校の先生たちに特別支援教育に関する助言をすることが役目の1つなのですが、そのなかで、特別支援教育について協力隊経験で学んだことをお伝えできるからです。派遣国の特別支援学校に通う知的障害の子どもたちとかかわって衝撃的だったのは、日本と違って自傷行為や他害行為がほとんどないことでした。原因として考えられたのは、ストレスの少なさです。日本の特別支援学校には時間割があり、各コマで何をさせるかがきっちり決まっている。一方、派遣国の特別支援学校には細かな時間割がなく、子どもたちに自由に過ごさせる時間が多かった。そこが子どもたちの受けるストレスの量の違いにつながっているのだろうと思います。子どもたちの将来のためには、ある程度自由を制約しながら、知識や技能をしっかり身に付けさせることはもちろん必要だとは思いますが、自傷行為や他害行為をしてしまうまでに自由を制約してしまうのは、潜在的な能力の発現を阻害してしまっているのではないか。そうした問題意識から、現在、巡回先の学校で先生が知的障害の子と「座りなさい」「嫌だ」「座りなさい」「嫌だ」といったやり取りを続けているようなケースを目にしたときは、先生に「授業の半分は自由に過ごさせてみてはいかがでしょう」と提案してみたりもしています。

B 私の協力隊時代の配属先も、時間割はあったものの、きっちりそれに沿って授業が進められるわけではありませんでした。それがどこまで良いのかはわからないのですが、確かにCさんのおっしゃるとおり、日本の特別支援学校と比べて子どもたちに「ゆとり」があると感じました。同時に、先生たちにも「ゆとり」があった。日本の特別支援学校の先生たちは、時間割にきっちり沿って授業を行い、人によっては放課後に部活動などの指導も行います。その後、事務作業や会議などもあり、子どもや指導のことについて教員間で議論する時間が持ちづらいのが現状です。そこで私は、自分自身の業務の精選や簡素化などを図る一方、同僚の先生たちに自立活動専任がメッセージを発信する場となっている毎月の通信に「ゆとり」に関する話を盛り込んだり、先生たちとの個別の会話でそれを伝えたりするよう努めています。

今後のビジョン

A 私が協力隊活動を通じて学んだことの1つは、教育における「ごちゃまぜ」の重要性です。協力隊時代の配属先は、私が着任するまで、障害の程度が重い子も軽い子も「ごちゃまぜ」にし、同じダンスや色塗りをさせるようなプログラムばかりを行っていました。そうしたなかで私は、障害の程度に応じてグループ分けをし、「読み書き」ができる子にはそれを教えるなど、能力に応じた教育の導入を支援したのですが、「ごちゃまぜ」にも一理あることが次第に見えてきました。先生が「軽度の知的障害の子しかこなせないだろう」と考えて出した課題を、重度の子がこなしてしまうなど、思いがけない可能性を引き出すことにつながっていたからです。そうした経験から、私がもしスクール・ソーシャルワーカーになったら、年代や置かれた環境が違う子たちと「ごちゃまぜ」になって学べるような習い事などを、積極的に紹介していこうかと考えています。

B 新たな専門性を獲得することで、協力隊Aさんの生き方は、率直にうらやましいと感じます。「新たな専門性」という意味では、私は現在、日本語教育の勉強をしています。最近は特別支援学校でも外国にルーツのある子どもが増えており、そういう子どもたちの支援に日本語教育の専門性が生かせるだろうとの考えからです。協力隊時代に、語学力不足で伝えたいことがうまく伝えられない辛さを私自身が体験したことや、日本語教育隊員との出会いが、外国にルーツのある子どもに目を向けるようになったきっかけです。

C 私も協力隊員として着任して間もないころ、同僚から「あなたはまだ言葉がしゃべれないから、この仕事はやらなくていい」と言われ、悔しい思いをした経験があります。私が働いている県では、障害の有無を問わず外国にルーツのある子が非常に増えてきていますが、問題の1つとなっているのは、「言葉が通じない」という理由で誤って知的障害だと診断されてしまうケースが発生していることです。私は特別支援教育コーディネーターとしてそうした問題への対策を取らなければならない立場にあるので、今後、外国にルーツのある子どもに関する実態の調査に力を入れていこうと考えているところです。

C

＊1 特別支援教育支援員…通常の学校（特別支援学校ではない学校）において、発達障害がある子などの学習面や生活面の支援をする職。
＊2 自立活動専任…「自立活動」は特別支援学校の学習指導要領に盛り込まれた指導領域で、障害による学習上・生活上の困難を改善・克服して自立を図るために必要な知識や技能などを指導すること。「自立活動専任」は、学級担任を持たず、校内の教員が行う自立活動の指導に関する支援や子どもへの指導などを行う教員。
＊3 特別支援教育コーディネーター…地域の幼稚園や学校に通う障害児の保護者や教員などから、障害児への支援に関する相談を受ける職。特別支援学校が持つ「地域の特別支援教育のセンター」という役割に基づいて置かれている。

Pick Up OB·OG会

「派遣国」や「職種」など、何かしらの共通項を持つ協力隊経験者によって構成するOB・OG会を、シリーズでご紹介していきます。

全国OV教員・教育研究会

会の目的

1. 協力隊を経験した教員の間のネットワークづくり
2. 協力隊を経験した教員による教育実践の共有など
3. 協力隊に現職参加する・した教員への派遣前と派遣中における支援
4. 教員を目指す協力隊経験者への支援
5. 協力隊を目指す教員への支援

日本で教員として働く協力隊のOB・OGは、協力隊経験で得たものを仕事のなかでどのように生かしていくか？　この課題について、互いに知恵やアイデアを持ち寄ることを目的とした県レベルのOB・OG会が結成され始めたのは2000年代。それらをつなぎ、さらに同種のOB・OG会がない地域の協力隊経験者をも取り込む全国レベルのOB・OG会として立ち上げられたのが当会だ。

活動のメインは、毎年12月に開催しているシンポジウム。協力隊経験を日本の教育現場で生かす方法をテーマに、研究者による講演、実践事例の発表、ディスカッションなどを実施。2019年のシンポジウムでは、現職教員特別参加制度によって派遣中の協力隊員による、テレビ会議システムでのディスカッションも行った。20年12月のシンポジウムは、ウェブ会議システムを使って開催する予定だ。

「当会は今後、日常的な情報交換の場を設けること、あるいはすべての都道府県で会員を確保し、支部のような組織をつくることなどを進めていければと考えています。『教員として働く協力隊経験者』という同じ立場にある者どうしで元気を分け合い、共に日本や世界の教育をより良くしていこうというのが、当会の趣旨です。教員として日本の学校教育に携わるなか、しんどさや違和感を覚えている方々には、ぜひ仲間になっていただければと思います」（吉岡代表）

2019年12月のシンポジウムで行った、派遣中隊員によるテレビ会議を使ったディスカッション

Outline

正式名称	全国OV教員・教育研究会
設立時期	2017年7月
法人格	任意団体

Organization

代表者	吉岡康裕 （タンザニア・理数科教師・2000年度2次隊）
会員数	290人
入会資格	本会の目的に賛同する、JICA海外協力隊活動に参加した者・参加を希望している者・興味関心がある者
会費	なし

Management

最高意思決定機関	会員総会
会員総会の頻度	毎年12月に開催
役員会の頻度	年に4回程度
会員・役員間の主な連絡手段	2020年からウェブ会議が中心

Contact

問い合わせ窓口	zenovkk@gmail.com https://www.facebook.com/zenovkk
情報発信の手段	https://www.facebook.com/zenovkk

ルーマニアOB会

会の目的

1. 日本とルーマニアの協力・交流・友好関係を深める。
2. 地域を超えた協力隊経験者等の間の親睦・交流を図る。
3. 国際協力やボランティア活動の分野で活動している協力隊経験者等を支援する。
4. その他、本会の目的を達成するために必要な活動を行う。

2019年1月に武蔵野市が主催したルーマニアの文化を紹介するイベントで、ルーマニアOB会が出したブース。同国の伝統工芸である「イースターエッグ」のつくり方を教えるワークショップを行った

ルーマニアへの協力隊派遣は1997年から2009年まで。その間、延べ116人が協力隊活動を展開した。同国で協力隊員として活動したメンバーで構成するルーマニアOB会が設立されたのは07年。以来、主な活動としてきたのは、国際協力イベントでのブースの出展だ。

16年からは、東京都武蔵野市が東京オリンピック・パラリンピック（以下、東京オリパラ）に向けて同国のホストタウンとして行う事業への協力も行っている。16年度には、ホストタウンとしての施策について意見交換をする懇談会の委員にルーマニアOB会の代表としてメンバーが任命され、2カ月に1度の会議でさまざまな提案を行った。その1つが、市民からの寄付を元手に同国のパラスポーツ選手を武蔵野市に招き、市民との交流の機会をつくるプログラムだ。19年には、卓球選手2人と柔道選手1人を招き、中学校で交流試合を行うなどするプログラムが実現した。その際に通訳を行ったのも、ルーマニアOB会のメンバーたちだ。17年度からは、東京オリパラやラグビーワールドカップに向けた事業を統括する市の実行委員会でも、ルーマニアOB会のメンバーが委員となり、同国の文化を伝えるイベントの企画などに参画している。

「日本では、ルーマニアを知っている人、あるいはルーマニア語を話せる人は多くないでしょう。そうした意味でも、当会が両国の架け橋を担う意義は大きいだろうと考えています」（増田代表）

Outline

正式名称	ルーマニアOB会
設立時期	2007年
法人格	任意団体

Organization

代表者	増田美智代 （ルーマニア・看護師・1997年度3次隊）
会員数	約100人
入会資格	❶本会員：ルーマニアに派遣された協力隊経験者 ❷賛助会員：その他（JICA職員、JICA専門家など）
会費	なし

Management

最高意思決定機関	会員総会
会員総会の頻度	不定期
役員会の頻度	不定期
会員・役員間の連絡手段	メーリングリスト

Contact

問い合わせ窓口	jocvrom-admin@googlegroups.com
情報発信の手段	—

JICA海外協力隊的プチテクガイド

簡単＆便利！ 活動・生活のパワーアップに役立つ

第109回

知っトク情報

改善の方法①

ナビゲーター＝武藤 正さん（シニア海外協力隊／ベトナム・品質管理・生産性向上・2016年度4次隊）

なぜなぜ分析

今回は「なぜなぜ分析」という手法を使って改善を行う方法を紹介します。問題が発生したときに「なぜ？」を5回繰り返せば本当の原因が発見でき、根本的な改善策を立てることができます。まずは、実例をご覧ください。

■実例：窓ガラスが割れた本当の原因は？

！ 問題発生▶自宅で休んでいると、突然居間の窓ガラスが割れました。

なぜ①「なぜか？」

――居間に硬式野球のボールが転がっています。

理由❶「ボールが窓ガラスに当たったから」

なぜ②「なぜボールが窓ガラスに当たったのか？」

――我が家の前の空き地で高校生が野球をしていました。

理由❷「あのボールが飛んできたから」

なぜ③「なぜ高校生がその空き地で野球をしているんだろうか？」

――ボールを取りに来た高校生に聞きました。すると

理由❸「リーダーがこの空き地で野球をやろうと言いました」

なぜ④「なぜリーダーはその空き地で野球をやろうと言ったのか？」

――リーダーに聞きにいきました。すると

理由❹「僕はこの空き地で野球もやってもいいと思ったから」

なぜ⑤「なぜ、君はこの空き地で野球もやってもいいと思ったの？」

理由❺「立入り禁止の看板がなかったから」

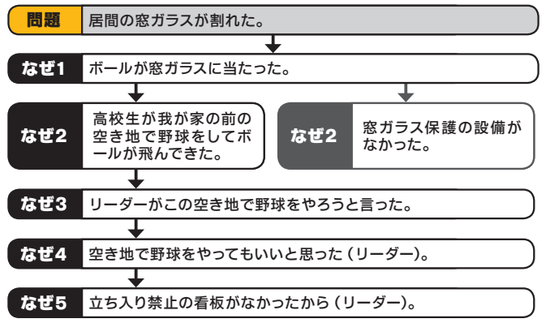
（空き地の入り口には「立ち入り禁止」の立札があったはずだぞ……変だな）

――空き地に行って見ると雑草が伸びて看板に覆いかぶさり見えませんでした。

改善策は「看板の前の雑草を刈る」となります。

この手法のポイントは、「なぜ」の答えは推測ではなく事実を検証して答えを探すこと。「なぜ」と「答え」の論理性が適切かどうかステップ毎に検証すること。また、答えは1つだけではなく複数ある場合、「なぜ」の繰り返しが5回まで行かない場合もあります。上記の会話を元に次のフロー図がつくれます。

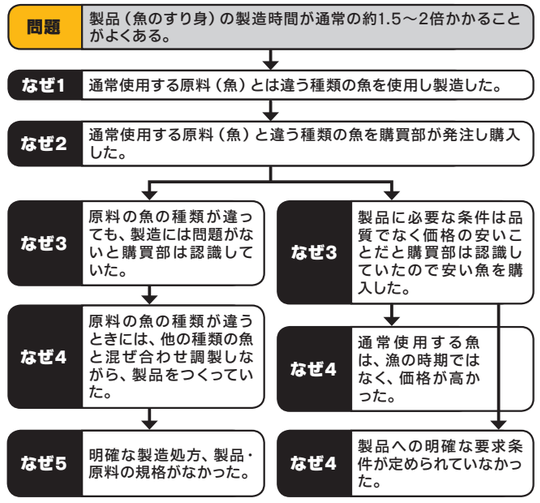
窓ガラスが割れた原因のフロー図



■武藤さんの実例から

私はベトナムで魚のすり身を製造している会社へ改善指導を行っていました。製造部門からは「製品の製造時間を短くしたい」という要望がありました。そこで関係部門の担当者を集め「なぜなぜ分析」を行いました（下図）。製造時間が長くなる原因は、**「明確な製造処方、製品・原料の規格がないこと」**だとわかりました。これを明確にすることが根本的な改善策でした。

魚のすり身製造会社／製造時間の短縮化検討フロー図



活動に役立つアイデア

手洗いの啓発活動③

ナビゲーター＝松岡由真さん（ベナン・感染症・エイズ対策・2017年度1次隊）

ORS（経口補水液）のつくり方

特に村の女性に対して「水と衛生」の啓発を行う際に追加していた内容です。下痢による脱水で病院へ行ったり、命を落としたりしてしまう子どもが多かったため、子どもが下痢になった際に飲ませる経口補水液の簡単なつくり方を紹介しました。わかり易いように、水、砂糖、塩の分量を家にあるもので測れるように換算し、実際その場でつくり飲んでもらっていました。

経口補水液をつくる村の女性

経口補水液をつくるときの砂糖の分量

砂糖の量が発表している機関によって異なります。

例1）水1ℓ＋砂糖大さじ2（20g）＋塩小さじ1／2

例2）水1ℓ＋砂糖大さじ4と1／2（40g）＋塩小さじ1／2

私は砂糖40グラムのレシピを参考にしていました。

用意する物とつくり方

水→現地によく出回っている**ペットボトル1本分**。啓発活動の時は、該当するペットボトルをいくつか持参する。

砂糖→家庭で使っている**スプーン4杯と半分**。もしくは現地で小売販売されている、ビニールの小袋に入った砂糖2袋分（このやり方は地域差があるので、事前にその地域の売られ方が調査できる場合に限ります）。

塩→3つの指（人差し指、中指、親指）で**2つまみ分**

レモン汁→半分を絞る（現地のレモンは小さかったので半分ですが、適宜調整を。なくても大丈夫ですが、あった方が飲みやすいです）。

上記4つをペットボトルに入れて、混ぜれば完成。

注意点

- ●きれいな水を使うこと。できればペットボトル入りの水を買ってくる。もしくは煮沸して冷ます。
- ●一気に飲まない。一口ずつを5～10分おきに飲む。
- ●吐いているときは、吐き気が収まってから。
- ●つくったらその日のうちに飲み切る。つくりだめはしない。
- ●1日に飲ませる量は小学生以下はつくった1リットルの半分、小学生以上は1リットル全部。

活動に役立つアイデア

収入向上活動

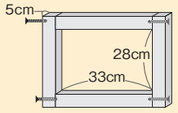
ナビゲーター＝髙橋将太さん（ガーナ・コミュニティ開発・2017年度4次隊）

ココナツ石けんのつくり方

貧困地域の女性たちの収入向上支援に取り組んでいました。現地ではココヤシの栽培が盛んで、女性たちはココナツオイルを製造し、市場に卸していましたが、手間もかかるうえに利益が薄い商品でした。そこで新たなビジネスとして「ココナツ石けん」の製造・販売を開始。包装などにもこだわったことで、首都でも売れる商品となりました。今回はこの石けんのつくり方を紹介し、次号で「包装」「販売のコツ」をお伝えします。

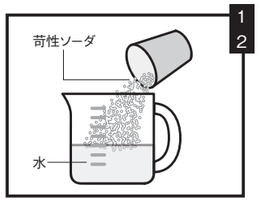
［材料］

- ●ココナツオイル…2300g
- ●パームオイル…1200g
- ●水…1050g
- ●苛性ソーダ…560g
- ●33×28×5㎝の四角形のフレームをつくるための木材



※油と水、苛性ソーダの比率を変更しなければ量は増減可能。
※他の植物性油脂でも作成可能。
※フレームの大きさ（容積）と材料の総量がほぼ同量にした方が、ロスは少ない。タッパーや牛乳パックのような容器でも代用可能。
※分量は計りを使い、正確に計る。
※苛性ソーダは劇薬なので扱いに注意し、扱うときは必ず手袋をする（できれば眼鏡も）。
※換気の良い場所で行う。
※材料を混ぜる前に大きいビニールの上にフレームを置き、石けんの素を流し入れる準備をする。
※水と苛性ソーダを混ぜる際は道具はプラスチック製やステンレス製のものを使う。

④マヨネーズ状になったらすばやく型に流し込み、数時間放置。羊羹くらいの固さになったら型から取り出し、好みのサイズにカットします。その後、1カ月ほど日陰に置いて熟成させます。



①まず、石けんを固めるためのフレームを作成します。
②水に苛性ソーダを少しずつ入れ（苛性ソーダに水を注ぐのはNG）、ゆっくり混ぜます。混ぜると発熱するので、そのまま体温くらいまで冷まします。

⑤完成。オイルの比率を変えると泡立ちや固さが変わるので、自分の理想とする黄金比率を見つけてみてください。石けんは熟成期間によっても使い心地が変わります。

③大きなボウルか鍋にオイルを入れ、そこに❷をゆっくり入れる。全部入ったら、泡立て器などで、マヨネーズ状の固さになるまでよく混ぜます。お好みで香料も。

投稿募集！

活動や生活に役立つちょっとしたテクニックをお持ちの方は、『クロスロード』編集室まで。

✉crossroads@sojocv.or.jp

先輩隊員たちの就職活動の記録をJICA進路相談カウンセラー・青年海外協力隊相談役とともに振り返ります。

先輩隊員の シューカツ記

就職先：
金秀バイオ株式会社（かねひで）
（民間企業：製造・販売業）

事業概要：沖縄県産品を用いた健康食品・サプリメントの製造・販売　など

シューカツ START

帰国 2カ月前

情報収集を開始

青年海外協力隊相談役、民間の転職サイト、帰国後はJICAの帰国隊員向け合同会社説明会を利用。当初は情報量が少なかったため、就活の方向性が定まらなかったが、職種・勤務地などの条件を絞り込むうちに方向性が定まった。私はもっと早い時期から始めればよかったと後悔しているので、早めの情報収集がお勧め。

帰国

応募開始（1次試験：書類）

応募書類は、履歴書。協力隊OBが数人在籍していることや、海外展開も視野に入れている企業だったので、協力隊経験で得た力（① 問題解決能力 ② コミュニケーション力③体力）と題して自己PRをしつつ、海外経験をアピール。また、地域に密着した企業なので郷土愛も伝えた。

帰国 1カ月後

2次試験（筆記と面接）

面接では、「志望動機」「協力隊経験（楽しかった事・苦労したこと）」「企業のイメージ」を聞かれた。自分の考えが整理できていたので、言葉に詰まることなく答えられた。

帰国 2カ月後

GOOD POINT!
面接前に、想定される質問に対する自分の意見をまとめておき、わからない質問は曖昧にせず、はっきり、ハキハキと応対したのがよかったと思っている。

帰国 3カ月後

内定

応募した数…2社
書類選考通過…2社
内定した数…2社

シューカツREVIEW
企業研究を行い、企業が必要する人材のイメージ像に沿うように履歴書作成と面接対策を行ったのが内定につながったと考える。

就職！

喜久里達也（きくざとたつや）さん（ボリビア・空手道・2016年度3次隊）

出身地 沖縄県
生まれた年 1990年（帰国時の年齢：28歳）
略歴

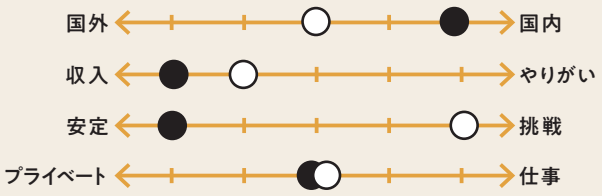
- ■2014年、日本大学卒業後、久米島町役場非常勤職員として1年間勤務。その後、フィリピンに語学留学（約1年）。
- ■2017年1月、青年海外協力隊員としてボリビアに赴任。道場・小学校、イベントなどで空手道の指導・普及活動を行う。
- ■2019年1月、帰国。
- ■2019年3月、金秀バイオ株式会社に契約社員として入社。翌4月、正社員登用。製造業務に従事。

自己PR

強み	協調性・柔軟性・体力
弱み	民間企業での業務経験がないこと、社会人経験が浅いこと
有する資格	高等学校教諭免許状（工業）

仕事選びの今昔。重視したのは？

協力隊参加前＝●　協力隊参加後＝○



仕事選びで一番大切にしたことは？

地元とかかわりがある事業に携わること、ワークライフバランスの実現。

就活をとおして一番苦労したことは？

応募から筆記試験までの期間が短く、筆記試験の内容をすべてカバーする時間がなかったことです。協力隊OBの社員からも情報収集をし、それを元に勉強範囲を絞って乗り越えました。

協力隊経験をどう伝えましたか？

面接では、協力隊活動中の困難とその困難にどう立ち向かったのかについて現地でのストーリーを織り交ぜて伝えました。また今後その経験・スキルを仕事でどう生かせるのかを、業務と協力隊経験の関連性を考えて話しました。現地のストーリーを話したことで、面接官に協力隊経験をより具体的にイメージしてもらうことができたのではないかと思います。

青年海外協力隊相談役による シューカツの総括

新垣光博（しんがきみつひろ）さん
担当地域：沖縄

喜久里さんは剛柔流空手五段という実力の持ち主です。帰国後の就職は、母校で空手の指導者になるか、それとも民間企業に就職するかという選択肢がありましたが、彼は沖縄の地域資源を活かした産業振興のために尽力することを決断しました。既卒者の場合、志望する企業への入社動機や何ができるかを問われることが多いことからその点をアドバイスしました。喜久里さんは想定される質問に対して自分の意見をまとめていたこと、また持ち前の協調性や柔軟性が評価され、採用に至りました。

jicaoicp-cda@jica.go.jp

●経歴：沖縄県監査委員事務局長、同土地開発公社理事長等を経て、2014年度より進路相談カウンセラー、18年度より現職。沖縄県協力隊を支援する会副会長兼務。

JICA海外協力隊ウェブサイト
「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」
▶https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※進路相談の対象は、青年海外協力隊および日系社会青年海外協力隊経験者のみとなります。
※カウンセラー／相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。

JOCV SPORTS NEWS

平和・平等・協力・健康……「スポーツが持つ力」と自身の専門性を掛け合わせ、未来をつくりあげるJICA海外協力隊経験者たちの現在の活動・仕事を紹介します。

サッカーを軸に子どもたちの未来をつくる

「サッカーを通じて夢を持つことの大切さを伝えたい」という想いのもと始まったSOLTILO FAMILIA SOCCER SCHOOL。青年海外協力隊経験者の土屋雅人さんは、このスクールのアフリカ地域を担当し、子どもたちにサッカー指導やサッカー以外の才能育成の機会の提供をしている。

SOLTILO株式会社
AFRICA DREAM SOCCER TOUR コーチ
土屋雅人（つちやまさと）さん
（サモア・サッカー・2015年度4次隊）

サッカー選手の本田圭佑（ほんだけいすけ）氏がプロデュースするサッカースクールを始め、国内のスポーツ施設運営事業や、海外プロサッカークラブ運営事業を行うSOLTILO（ソルティーロ）株式会社。サッカースクールは、日本国内に61校、海外に8校あり、アフリカの3カ国では社会貢献活動として無償で子どもたちにサッカーを教えている。このアフリカでの活動を担当するのが、サモアでサッカー隊員として活動した土屋さんだ。

「家庭の事情でスクールにお金を払えないなど、サッカーをする機会に恵まれない子どもたちを対象にサッカーを教えています」

無償でのサッカー教室以外に、現地のエリートサッカーアカデミーに入団できた子どもには、月謝や交通費を一部負担し、サッカー選手を本気で目指す機会の創出に加え、サッカー以外の才能を育成する機会も提供している。

「スラムで生まれた子はスラムで死ぬ」という言葉を土屋さんは以前聞いたという。生まれた場所から出られず、職業の選択肢があることを知らないまま一生を終えてしまうのだ。

「サッカー教室に来る子は、みんなサッカーが大好き。将来の夢は？と聞けばサッカー選手と答える子が多い。でも職業体験に行った後に聞くと『プログラマーになりたい』と言うこともありますし、夢の選択肢が増えると人生の幅が広がるのではないかと思います」

現在はスポーツを通した社会貢献活動に携わっているが、隊員時代は「スポーツと国際協力」について考えたことはなかったという。

海を見るのが初めてで、ペットボトルに海水を入れて、家族へのお土産とする子どもたち

ウガンダでサッカーの指導をする土屋さん。現地で提携しているクラブの手伝いやコーチとの意見・情報交換もしており、入団を勝ち取った子どもたちを見守り続ける。SOLTILOはウガンダでプロサッカークラブも経営しており、いつかサッカースクールからプロ選手を輩出することも目標のひとつだ

「どうしたらサモアでサッカーを普及できるのか、ということばかりを考えていました」

学校におけるサッカー教室の実施を協力隊活動の柱にしていた土屋さんは、任期満了時には週に10校でサッカー教室を実施できるほど普及に成功した。挫折を味わったのは帰国1カ月後。現地に連絡すると実施しているのは2校だけだと伝えられる。

「私がやりたいことに現地の人が協力してくれただけで、何の役にも立てなかったのです」

その後、JICAの国際協力推進員*として働き、協力隊事業のことを話すことが増え、初めて「スポーツと国際協力」の勉強をした。そこで知ったのは、スポーツが持つ人と人をつなぐ力を活用することで、女性や障がい者など弱い立場の人たちが社会に出るきっかけとなったり、対立する民族同士が融和する潤滑油となったりするかもしれないということ。サッカーと国際協力、この2つで再チャレンジしたいと思い、次の仕事に選んだのがSOLTILOだ。

「サッカーをツールに社会課題にどうインパクトを与えられるか、協力隊時代はその視点が欠けていたということを学びました」

以前、SOLTILOで海の仕事を知る社会科見学として、ケニアの子どもたちを港湾に連れて行ったときのこと。初めて海を見る子も多く、両親のお土産にと海水を入れたペットボトルを抱えて目をキラキラさせる子や、海を見て「海の力強さに感動した、大きなコンテナ船を支える海の力に」という少年がいた。

「そんな発想ができる子どもたちと接していると、私自身が知らぬ間に忘れてしまった大切なものを思い出させてもらっているような感覚になります。彼らの世界が広がる瞬間に出会うと、私にも発見があるんです」

アフリカでの活動はパートナー企業から資金などのサポートがあって成り立つ。支援をいただいて終わりではなく、今後は可能な限りパートナー企業の方に子どもたちの世界が広がる様子を「自分ゴト」として捉えてもらえる機会をつくり、一緒に子どもたちの背中を押していきたい、土屋さんはそう考えている。

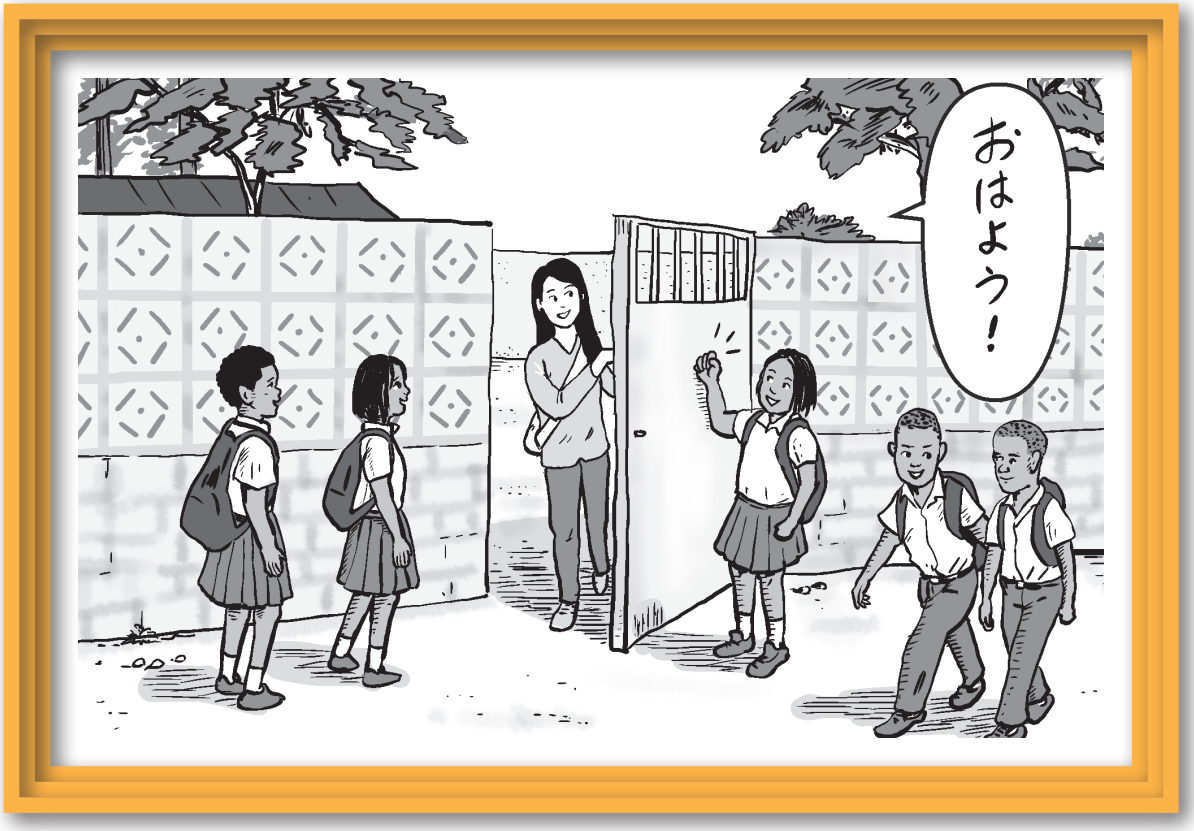
●プロフィール：1989年生まれ、埼玉県出身。日本大学卒業後、メーカー勤務を経て、2016年に青年海外協力隊員としてサモアに赴任。サモアサッカー協会の一員として強化・普及活動を行う。帰国後は、埼玉県国際協力推進員、ラグビーワールドカップ2019サモア代表リエゾンオフィサーを務めた後、現職。ケニア・ルワンダ・ウガンダの3カ国でサッカーを通じた社会貢献活動に従事している。

*国際協力推進員…「地域のJICA窓口」として、JICAの国際協力事業の支援や広報啓発活動事業の推進、地方自治体が行う国際協力事業との連携促進などを担当する。

JICA海外協力隊の

つぶやき

お題 ▶ 通勤



イラスト＝牧野良幸

今月の1枚

通勤は大勢で。

活動先は小学校で、家の隣。家の前は生徒たちの通学路でドアをいたずらでドンドンと叩きだした頃が通勤時間。特に約束はしていなくても何人かは外で待っていて一緒に行く。隣に並んでみたり、後ろから付いてきたりする生徒たち。たまーに誰も待っていないと寂しさを感じる。

ペンネーム：マンゴーさん（アフリカ・青少年活動・2014年度派遣）

★近いけれどすぐ着かない

配属先の病院までは徒歩1分。犬から逃げたり、3歩歩けば跳ねているカエルや飛んでいるバッタが体にぶつかってきたり。そんな道。強い雨の日には隣にある同僚の家で「雨、止むかなぁ」と外をぼーっと眺めて、配属先に行ける天気になるまで時間をつぶすことも。そんな毎日が今は愛おしいな。

ペンネーム：ピキニニGirl さん
（大洋州・看護師・2018年度派遣）

★★能動的アトラクション

日本での通勤は自分と繋がる時間だ。歩きながら頭を整理し、電車やバスではメールの返信をしたり、つかの間の休息をとったり。派遣国では、ときに道端のギター弾きに歌をリクエストするなど、周りの世界と繋がる「最高のアトラクション」だった。うっかり眠れちゃう今の日本の通勤もいい。でも、通るたびに新しい音や笑顔と出会えるあの風景に再び同化できたなら……。

ペンネーム：笑みちゃん さん
（アフリカ・コミュニティ開発・2018年度派遣）

★★★思わぬ旅

少し離れた活動先に行くには、乗合タクシーを利用。基本は乗車順で行き先に向かうが、前後することも。赴任当初は、行きたい方向と全く逆に進んでいくと不安に思っていたが、数カ月すると慣れ、「任地にこんな所もあったのか～！」と新たな場所を知れる旅に変わった。

ペンネーム：マイス さん
（中南米・青少年活動・2018年度派遣）

募集中のお題
「歯みがき」「お風呂」「食器洗い」

投稿は『クロスロード』編集室まで
（P35をご覧ください）

あなたのつぶやきがイラストになるかも！？

JICAとJOCが連携協定を締結 ～スポーツを通じた国際貢献を強化～

JOCの山下泰裕会長（右）とJICAの北岡伸一理事長（左）

7月27日に、JICAと公益財団法人日本オリンピック委員会（JOC）は、スポーツを通じた国際貢献強化に向けた連携協定を締結しました。署名は、JOCの山下泰裕（やましたやすひろ）会長とJICAの北岡伸一（きたおかしんいち）理事長との間で行われました。

本連携協定は、新型コロナウイルス感染症が世界各地で社会生活に大きな影響を与える中、スポーツが社会や人々のつながりに与える根源的な価値及び重要性を改めて認識し、スポーツの力や価値を国際協力において最大限に活用することを目的としています。

この連携協定締結を受け、JICAとJOCはJICA海外協力隊事業における連携、開発途上国に向けたオリンピアンの情報発信強化をはじめとした、スポーツを通じた国際貢献活動を推進します。

2020年秋募集および 2020年度短期第2回募集中止について

2020年秋募集および2020年度短期第2回募集については、在外拠点での相手国政府からの要請取付と確認が行えないことから、募集を中止します。

2021年春以降の募集については決定次第、JICA海外協力隊ウェブサイトなどでお知らせします。

▶JICA海外協力隊ウェブサイト
https://www.jica.go.jp/volunteer/

JICA筑波主催「ストレスマネジメントセミナー」に一時帰国中の隊員が参加

セミナーで体をつかってリラックスする工夫を学ぶ研修生と隊員、JICA筑波の職員

7月16日にJICA筑波では、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、母国へ戻ることが困難となっている外国人研修員向けに「ストレスマネジメントセミナー」を実施しました。

同セミナーには、茨城県内の一時帰国中隊員2人もオブザーバーとして参加。セミナー後の交流会には、10人の研修員と隊員、そしてJICA筑波の職員も参加し、新型コロナウイルスの感染予防に十分配慮しつつも、研修員・隊員双方のストレス発散にも貢献する活発な交流会となりました。

▶JICA筑波Facebook
https://www.facebook.com/jicatsukuba

一時帰国中･派遣前の小学校教育隊員がオンラインで交流

7月21、22日の2日間、小学校教育隊員を対象にJICA海外協力隊技術顧問（小学校教育）の主催によるオンライン交流会が開催され、一時帰国中の隊員など、延べ45人が参加しました。一時帰国中隊員と派遣前に待機となった隊員たちがグループに分かれ、活動報告や今抱えている不安や悩みなど、自由に話し合いました。

一時帰国中隊員からは、「久しぶりに活動報告ができて楽しかった」という意見が聞かれ、派遣前に待機となった隊員からは、「先輩隊員の体験談が聞けて参考になったので、派遣が決まるまで語学の勉強や教材研究を続けたい」という前向きな意見が聞かれました。

クロスロード

令和2年9月号［第56巻第8号 通巻660号］
発行日　令和2年9月1日

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1
竹橋合同ビル

『クロスロード』ウェブ版は
以下のアドレスからアクセスできます。
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html

ご意見・ご感想をお聞かせください。

アイデアも大募集！

今号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか。ご感想・ご意見をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画や特集のテーマ、ご紹介いただけるアイデアがございましたら、下記のメールアドレスにお送りください。

以下のようなアイデア・投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活での“失敗”談、お聞かせください。
- 活動や日常でちょっと役立つ、そんな技をお伝えください。もしくはこんな技を紹介してほしいというご要望もお待ちしています。
- P34の下に記載されている「お題」で派遣国での活動・生活のことをつぶやいてみませんか。
- 日本でつくれる派遣国レシピをお寄せください。

eメール
一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

※本誌に掲載されている記事等の内容は執筆者の個人的見解であり、JICA の公式見解を示すものではありません。

2020年9月1日発行（毎月1回1日発行）第56巻第8号 通巻660号 編集・発行 独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

隊員めし おかわり！

日本でつくる現地の「めし」は活力の源

隊員's ポイント！
玉ネギをしっかり水にさらすと、調味料となじみやすくなる！

アイマナスを初めて食べたのは、配属先での食事。茹でた芋とアイマナスでしたが、辛いだけで何の味もしませんでした。アイマナスはさまざまな食事に付いてきますが、最初の頃は口の中に辛さしか残りませんでした。その後、人によってつくり方が異なることを知り、レモンやトマトが入ったものを食べて初めておいしいと思いました。今回はスタンダードに近いアイマナスのレシピです。アイマナスは現地語で「唐辛子」という意味で、料理名もアイマナスなので唐辛子さえ入っていればいいのかもしれません（笑）。

一度口にしたものは記憶に残っているものです。簡単な料理の付け合わせにすれば配属先のことを、手の込んだ料理に付ければ隊員同士語り合った日々を思い出します。帰国して1年以上も経ち、任地とかかわるのは難しいのが正直なところですが、未来の隊員や待機中隊員などこれからの世代のサポートをしていきたいと思います。

今月の料理人
佐藤信希（さとうのぶき）さん（東ティモール・料理・2016年度3次隊）
●活動内容：国立職業訓練校に配属され、ホスピタリティコースを担当する。

酸っぱ辛い野菜のソース 東ティモールの「アイマナス」

材料（5人分）

玉ネギ…中サイズ2個
紫玉ネギ…1個
トマト…中サイズ1個、またはミニトマト5〜6個
塩…小さじ1
酢…具材が浸るくらい
鷹の爪…ひとつまみ。辛さに自信がある方はがっつりどうぞ！

つくり方

❶玉ネギは細かく刻んだら水に10分さらす。
❷トマトは1cm角に切る。
❸玉ネギの水を切ったら全て混ぜ、30分ほど置く。サラダや魚料理、肉料理、豆腐や野菜炒めにかけてもおいしいです。

アレンジ

日本の食生活に合うように、基本のアイマナスを以下のようにアレンジしました。
和風タイプ①→酢を白だしに変更
和風タイプ②→酢＋鷹の爪を酢味噌＋七味唐辛子に変更
韓国タイプ→酢を市販のキムチに変更
みなさんの派遣国にあるメジャーな調味料にも合うアレンジが見つかるかもしれません。各国タイプのアイマナスをつくってみては？？

ひとくちメモ

ティモール人のレシピはサラダ油をたっぷりと入れるのですが、油を入れずに冷蔵保存することで日本で常備菜として使用できるようにしました。

❶水にさらすと辛味が抜ける。

❸基本のアイマナス。常備菜にもなる

今月号の表紙
パラグアイ

文＝村上奈々美（むらかみななみ）さん
（看護師・2017年度2次隊）

私の配属先は、農村地域を管轄する一次医療機関。住民の多くが配属先に容易にアクセスできないなか、私は病気の「予防」に関する啓発活動の活性化に力を入れました。写真は、配属先が管轄する小学校に同僚看護師と共に赴き、「歯磨き」の適切なやり方を指導したときの様子です。右端の同僚看護師が持つ歯ブラシの模型など、子どもたちの興味を引くような教材を活用するよう心がけました。

※村上さんの活動の詳細は8〜9ページで紹介しています。